

兵庫鎖立聞素環環状鏡板付轡の特質

大谷 宏治

要旨 環状鏡板付轡（円環轡）のうち兵庫鎖を立聞とする素環環状鏡板付轡（兵庫鎖立聞素環円環轡）について轡の連結方法から大きく4種類に区分し、I段階は鏡板介在型が主体で、II段階以降鏡板介在型から遊環介在型・衡介在型と瓢形円環轡が派生・展開したと想定した。また、兵庫鎖立聞素環円環轡の初期の属性は韓半島でも確認できるが、兵庫鎖を使用するものは日本列島で主体的に採用されることから、倭王権が鉄製轡の独自色を示すため、内湾鈴円形鏡板付轡等への兵庫鎖の採用と関連させ、兵庫鎖立聞素環円環轡は兵庫鎖付小型矩形立聞円環轡とともに日本列島で創出されたと想定した。II・III段階の変化もほかの轡と連動して変化することから轡生産の相対的な変化に連動した工人集団の再編と関連すると想定した。

キーワード：兵庫鎖立聞素環環状鏡板付轡の分類・編年・系譜・成立過程 古墳時代後期～終末期

1 はじめに

環状鏡板付轡（以下、円環轡とする）は、報告書等では鉄製轡として一括されることが多い。しかし、鏡板が環であることは共通するものの、立聞の有無や種類に差異がある。これまでの研究により円環轡はすくなくとも組合立聞系（素環系）と造付立聞系に大きく区別でき（岡安1984、花谷1986など）、さらにそれぞれが数種類に区分できる（図1）。また、立聞の有無・形態差は、成立過程や系譜なども大きく異なる可能性が高い。したがって、それぞれの円環轡の特徴を詳細に検討したうえで、古墳時代における意味の違いを比較検討する必要がある。これまで筆者は、その前提として瓢形（大谷2008）、小型矩形立聞（大谷2016a）、

鉢留立聞円環轡（大谷2010）について個別に分析を行い、それぞれの特徴について論じた。ここでは、円環轡のうち、円環（素環）鏡板に兵庫鎖を組み合わせて立聞とする兵庫鎖立聞素環円環轡を分析し、その特徴を明らかにしたい。

2 兵庫鎖立聞素環環状鏡板付轡研究史

兵庫鎖立聞素環円環轡の分析に入る前に、これまでに先行研究により明らかになった兵庫鎖立聞素環円環轡の特徴をみておきたい。

岡安光彦の研究 岡安光彦氏（岡安1984）は、円環轡全体の分類・編年案を示す中で、兵庫鎖立聞素環円環轡について論じた。氏は、組合立聞系の轡で兵庫鎖

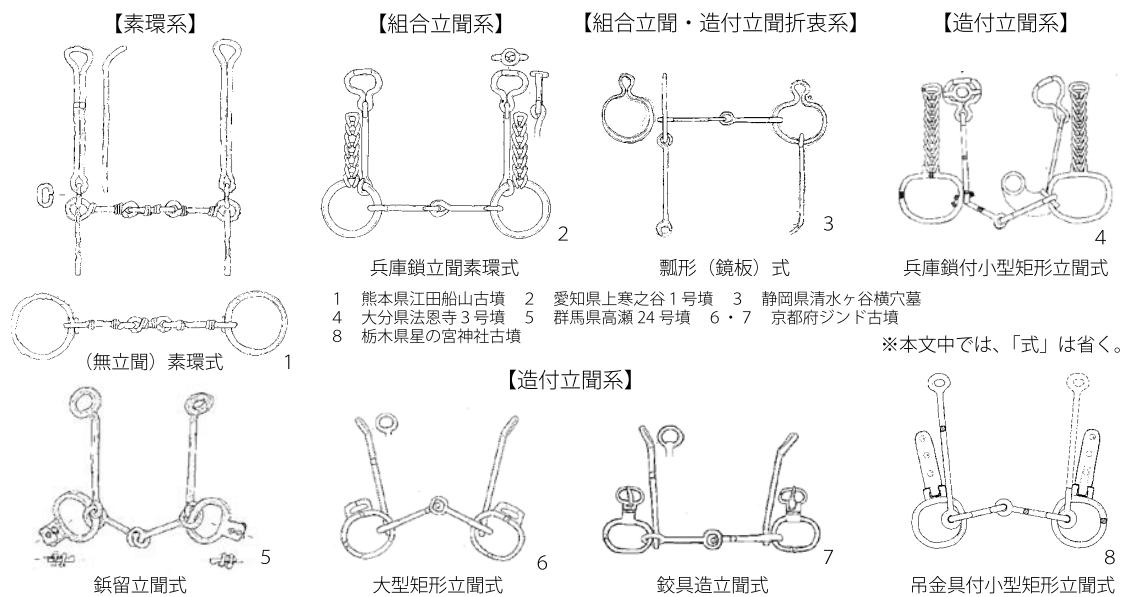


図1 環状鏡板付轡の主な種類

を立聞とするものを、10連以上の「長連兵庫鎖連結」、2連以上の「複連兵庫鎖連結」、1つの兵庫鎖の片方の輪をもう片方の輪にくぐらせる「裏連兵庫鎖連結」、1つ兵庫鎖で環を挟み込む「単連兵庫鎖連結」に区分した。この分析をもとに時期的変遷を明らかにし、「北山2号墳型」(複連兵庫鎖連結・筆者大谷の鏡板介在型(大谷2008)・別造り引手壺)、「中宮2号墳型」(兵庫鎖の連数が減少した複連兵庫鎖連結・鏡板介在型・屈曲引手)、「山畠22号墳型」(兵庫鎖1単位で裏連)、「黒田1号墳3号型」(単連)と変化することを示した。

坂本美夫の研究 坂本美夫氏(坂本1985)は、兵庫鎖立聞素環円環轡を、取り付けられる兵庫鎖の大きさから、「扇状兵庫鎖立聞素環鏡板付轡」と「角状兵庫鎖立聞素環鏡板付轡」に分類した。氏は前者を兵庫鎖の連数から3期に区分し、I期(6世紀第1四半期後半)は鏡板が大型で兵庫鎖が9連以上のものが主体であること、II期(6世紀第2四半期)は鏡板が大型で兵庫鎖が1~6連で、連数が少ないものがより新しく位置づけられること、III期はやや鏡板が小ぶりになり、兵庫鎖1~3連で、別造り引手壺を取り付けたものが多くなることを論じる。後者は、兵庫鎖の大きさで前者と区分するが、その基準が明示されておらず、前者と区分するのが容易ではない。前者は鏡板を介して轡を組み合わせるものが主体で、後者は銜を介して組み合わせるものが主体であると述べる。後述するように前者の見解は今でも大きな変更の必要はない。

花谷 浩の研究 花谷浩氏(花谷1986)は、円環轡全体の分類・編年を組み立てる中で、兵庫鎖立聞素環円環轡について検討した。氏は兵庫鎖の連数により大きく、a類(兵庫鎖複数)、b類(兵庫鎖単数)に区分した。さらに鏡板・引手・銜の連結方法により、a類をI式(筆者大谷の遊環介在型。大谷2008)、II式(鏡板介在型)、III式(銜介在型)、b類をII式(鏡板介在型)、III式(銜介在型)に区分する。1群(~TK10、a類I・II式、b類II式)→2群(MT85~TK43、a類III式)→3群(TK209、b類III式)へと変化するが、a・b類が1群から存在することから、a類からb類が派生したわけではないことを論じる(花谷1986)。

課題の抽出 以上、主に3者が円環轡を総合的に分析する中で、兵庫鎖立聞素環円環轡の兵庫鎖の連数による分類を行い、MT15型式期に出現し、兵庫鎖の連数が多いものから少ないものへ変化したこと、連数が長いものに鏡板介在型が多いこと、連数が短いものに銜介在型が多いことが明らかになった。

一方、岡安氏と花谷氏が当該轡の系譜関係を論じており、岡安氏は長連、複連、裏連、単連のものが同一系譜の中で変遷するとした。一方、花谷氏は単連のものが古くから存在すると想定し、兵庫鎖複数のものと、単数のものが併存し、複数のものから単数のものは派生しないとした。このように両者の見解が異なり、当該轡に系譜が異なるものが含まれていると想定できることから、編年と系譜関係について検討を深める必要がある。

また、韓半島でも円環轡の出土が徐々に増加しているが、造付立聞系はいまだ出土しておらず、立聞を持たない素環(無立聞素環)が主体である。兵庫鎖を立聞とするのは玉田M3号墳の1例のみで、当該轡の成立過程や系譜関係について韓半島からの搬入とは断定しにくい。さらに当該轡の分布について論じられることが少なく、分布から当該轡を評価する必要がある。

小論での検討 岡安、坂本、花谷氏が分析を行ってから30年経過したため、まずは当該轡の分析の前提として、その集成を示す(表1)。つぎに、集成をもとに属性の組合せ(図3・4)から当該轡を分類した上(図2)で、編年を確認し(図5)、当該轡の変遷について論じる。また、分布のあり方について時期ごとに検討する(図6・7)。さらに、その検討結果から当該轡の系譜関係や成立とその背景について明らかにしたい(図8~11)。

3 兵庫鎖立聞素環環状鏡板付轡の分類

(1) 集成の提示

兵庫鎖を立聞として円環(素環)鏡板に組み合わせるものを兵庫鎖立聞素環円環轡(註1)とする。筆者の集成では、日本列島と韓半島(1例のみ)で総数約100例が確認できる(表1、註2)。

(2) 分類

上記の集成結果から、轡(鏡板・引手・銜)の連結方法について兵庫鎖3連以上のものは「鏡板介在型」が主体で、2連・1連のものに「遊環介在型」・「銜介在型」が増加する(図3)ことから、轡の連結方法と兵庫鎖の連数に相関関係が見出せる。小論では、轡の連結方法・兵庫鎖の連数を基準に分類し、さらに兵庫鎖に吊金具を装着するかしないかにより細分する。

轡の連結方法は、「鏡板介在型」、「遊環介在型」、「銜介在型」、「遊環介在特殊型」に区分する。兵庫鎖の連数は、「遊環介在型」・「銜介在型」で採用が増加する

表1 兵庫鎖立間素環環状鏡板付巻一覧表

古墳名	県名	市町村名	墳形	規模	埋葬	段階	連数	分類	振等	引手	環幅	立幅	引長	巻	巻種	杏葉	文献	
星の宮神社古墳	栃木	下野市	円?	46	横石	III	1	鏡板	蕨	●	7.8	3.2	13.5	●	小型	-	1	
小野菫根4号墳	栃木	栃木市	円	20	横石	I	8	鏡板	-	-	8.0	1.9	12.7	○	-	-	2	
上野原12号墳	栃木	下野市	円	22	堅石	II	2	吊遊環	-	△	7.8	2.1	17.1	○	-	-	3	
恵下古墳	群馬	伊勢崎市	円	27	堅石	I	3	鏡板	-	●	7.8	1.6	16.0	○	-	双・劍	4	
綿貫市ヶ原出土	群馬	高崎市	-	-	-	I	4	鏡板	-	●	8.6	3.4	16.0	-	-	-	5	
黒田1号墳	埼玉	深谷市	円	17.5	横石	III	1	鏡板	蕨	△	6.6	2.6	13.6	●	瓢形	-	6	
黒田4号墳	埼玉	深谷市	円	18	横石	I	4	鏡板	-	●	8.6	2.5	20.0	○	-	-	6	
一夜塚古墳	埼玉	朝霞市	円?	50	木炭櫛	I	5	特殊	端環	■	8.0	1.4	-	●	十梢	三心	7	
大山台33号墳	千葉	木更津市	円	18.3	木直	I	4	鏡板	-	■	7.5	2.2	18.0	○	-	-	8	
北高森3号墳	神奈川	伊勢原市	古墳	-	粘土?	I	7	鏡板	-	-	-	2.4	-	○	-	-	9	
鶴見区駒岡町出土	神奈川	横浜市	-	-	-	II	2?	遊環	-	△	7.8	-	-	-	-	-	10	
大藏経寺無名墳	山梨	笛吹市	古墳	-	-	I	3	吊	-	-	6.4	1.6	-	●	兵素?	-	11	
大藏経寺無名墳	山梨	笛吹市	古墳	-	-	I	3	吊	-	-	6.4	1.6	-	●	兵素?	-	11	
蛇塚1号墳	長野	佐久市	円	16.8	横石	III	1	鏡板	蕨	△	6.6	2.8	11.0	○	-	-	12	
吹上山の上古墳	長野	佐久市	古墳	不明	木直?	II	2	鏡板	-	●	7.6	3.8	15.0	●	円環3	-	13	
塚穴原1号墳	長野	上田市	円	21.5	横石	III	1	衡	-	△	7.4	2.8	16.0	●	円環2	-	14	
久保田正清寺古墳	長野	飯田市	後円	47	横石	I	2+	鏡板	-	■	8.4	2.3	20.8+	○	-	劍・三梢	15	
中原4号墳	静岡	富士市	円	11	横石	II	2	鏡板	-	△	7.8	3.3	13.4	●	円環2	-	17	
勝栗山古墳	静岡	浜松市	古墳	-	不明	I	2+	-	-	△?	9.6	2.8	-	○	-	-	18	
上寒之谷1号墳	愛知	豊橋市	円	9	横石	I	7	鏡板	-	■	7.8	2.0	12.8	○	-	-	19	
稻荷山1号墳	愛知	豊橋市	円	16.7	横石	II	2	鏡板	-	△	7.4	4.0	16.4	●	素環	-	20	
豊田大塚古墳	愛知	豊田市	円	37.8	横石	I	21	鏡板	-	■	9.5	2.4	21.4	★	十梢	-	21	
曾本二子山古墳	愛知	江南市	後円	60	不明	I	6	鏡板	-	-	7.0	2.0	15.2	★	十梢	-	21	
松ヶ洞9号墳	愛知	名古屋市	円	15	木直	I	2+	鏡板	-	二	9.0	3.0	-	●	複環	-	21	
船来山0264号墳	岐阜	本巣市	円	16	横石	I	3	鏡板	-	■	7.6	2.8	23.0	○	-	-	22	
西洞山6号墳	岐阜	各務原市	円	12	横石	III	1	鏡板	-	●	8.1	3.6	20.0	●	大型	-	23	
大牧1号墳	岐阜	各務原市	後円	30+	横石	III	1	鏡板	-	●	8.0	3.6	19.4	★	瓢形	三心	16	
伝・名張一宮神社古墳	岐阜	高山市	古墳	-	-	III?	1+	-	-	-	8.0	3.0	-	-	-	-	21	
伝・広瀬亀塚古墳	岐阜	高山市	古墳	-	-	I	1+	-	-	■	7.0	3.0	16.0	★	十梢	-	21	
丸尾山古墳	三重	伊賀市	円	21	横石	I	5	吊鏡板	-	■	-	2.0	-	★	十梢	-	24	
向出山3古墳	福井	敦賀市	円	15	横石	II	2	遊環	-	●	8.1	3.1	13.5	●	兵小	-	25	
北谷7号墳	滋賀	草津市	古墳	-	横石	II	2	遊環	-	△	9.2	2.6	16.8	○	-	-	26	
外輪1号墳	滋賀	甲良町	円	13.6	横石	III	1	遊環	蕨	●	7.6	3.0	11.0+	○?	-	-	27	
アバ田2号墳	京都	京丹後市	円	12	横石	III	1	遊環	-	△	8.1	2.6	16.6	○	-	-	28	
遠所1号墳	京都	京丹後市	円	15	横石	I	3+	-	-	■	-	1.5	-	○	-	-	30	
桃山1号墳	京都	京丹後市	円	19	木直	I	10	鏡板	-	■	7.6	2.2	24.0	○	-	-	32	
柿谷古墳	京都	八幡市	方	12	木直	I	5	鏡板	-	●	8.8	2.4	17.8	○	-	-	29	
小谷17号墳	京都	南丹市	円	9	横石	I	4	吊鏡板	-	●	7.0	2.1	12.0	○	-	-	31	
安国寺平山古墳	京都	綾部市	円	20	木直	I	5	鏡板	-	■	8.3	1.3	18.0	○	-	-	33	
吉備塚古墳	奈良	奈良市	円?	25+	木直	II	2	-	-	-	未	未	未	●	兵素?	-	34	
吉備塚古墳	奈良	奈良市	円?	25+	木直	II	2	-	-	-	未	未	未	●	兵素?	-	34	
兵家11号墳	奈良	葛城市	古墳	-	木直	I	1	鏡板	-	●	8.1	4.2	17.5	○	-	-	35	
新沢千160号墳	奈良	樋原市	後円	30	木直	II	1	吊銜	-	■	7.8	2.4	21.0	○	-	-	36	
寺口忍海H35号墳	奈良	葛城市	円	14	横石	I	3	鏡板	-	●	6.4	2.2	12.8	○	-	-	37	
巨勢山146号墳	奈良	御所市	古墳	-	木直?	II	2	鏡板	-	●	未	未	未	○?	-	-	38	
山畑33号墳	大阪	東大阪市	円	-	横石	II	2	遊環	-	△	8.8	3.0	16.0	○	-	鐘形	39	
切戸1号墳	大阪	羽曳野市	円	12	横石	II	2	吊鏡板	-	●	7.2	3.2	12.0	○	-	-	40	
箱冢4号墳	兵庫	篠山市	円	19	横石	I	6	鏡板	-	●	8.0	2.8	18.8	●	瓢形	-	41	
剣坂古墳	兵庫	加西市	円	20	横石	I	4	鏡板	-	△	6.4	2.0	11.2	○	-	-	42	
名草3号墳	兵庫	加東市	円	13	横木	III	1	衡	捩	●	5.1	3.0	13.5	○	-	-	43	
南所3号墳	兵庫	神戸市	円	18	横石	III	1	遊環	-	△	8.0	3.8	16.0	●	大型2	-	44	
六部山80号墳	鳥取	鳥取市	円	13	横石	III	1	遊環	-	●	9.0	3.6	18.6	○	-	-	45	
めんぐろ古墳	島根	浜田市	円?	20?	横石	I	5+	特殊	-	-	7.4	1.9	-	★	f字	剣菱	46	
小中4号墳	岡山	勝央町	円	12.4	木直	III	1	衡	-	●	未	未	未	○	-	-	47	
小池谷2号墳	岡山	勝央町	円	9	木直	I	3+	鏡板	-	■	7.8	2.0	16.2+	○	-	-	51	
北山2号墳	岡山	岡山	美作市	古墳	-	木直	I	6	鏡板	-	■	7.4	2.1	19.8	○	-	-	48
中宮1号墳	岡山	岡山	津山市	造円	23	横石	I	5	鏡板	-	●	9.0	3.0	15.8	★	f字	-	49
斎富2号墳	岡山	赤磐市	長方形	23	横石	I	8	-	-	-	-	-	-	○	-	-	50	
常森3号墳	山口	下松市	円	16.5	横石	III	1	遊環	-	△	5.6	2.0	11.4	●	円環2	-	52	
常森3号墳	山口	下松市	円	16.5	横石	III	1	衡	蕨	-	5.2	2.2	13.0	●	円巻2	-	52	
馬塚古墳	山口	山口市	古墳	-	-	II	2	衡	-	△	7.0	4.0	-	? -	-	-	53	
大麻町所在古墳	徳島	鳴門市	古墳	-	-	II	2	衡	-	△	7.0	4.0	-	? -	-	-	54	
御所山古墳群	香川	高松市	古墳	-	-	III	1	衡	-	●	8.3	3.4	16.0	? -	-	-	55	
東山鷲ヶ森古墳群	愛媛	松山市	古墳	-	-	I	8	鏡板	-	■	8.8	3.0	-	? -	-	-	56	
瀬戸風岬1号墳	愛媛	松山市	円	18	横石	II	2	鏡板	-	●	7.5	3.3	16.0	●	素環	-	57	
長谷奥古墳	愛媛	松山市	円	21	横石	I	3	特殊	-	-	8.1	2.7	-	● ?	-	-	58	
土壇原古墳群	愛媛	松山市	古墳	-	-	-	-	未	未	未	未	未	未	未	未	-	59	
芝ヶ崎1号墳	愛媛	松山市	円	12	横石	III	1	鏡板	未	未	未	未	未	未	未	未	59	
片山龍德寺山1号墳	愛媛	松山市	円	25	横石	-	-	未	未	未	未	未	未	未	未	未	59	
庄ノ谷古墳	愛媛	松山市	古墳	-	-	-	-	未	未	未	未	未	未	未	未	未	59	
上難波南0号墳	愛媛	松山市	円?	-	横石	III	1	鏡板	捩	●	6.6	1.8	13.0	○	-	-	60	
禰宜屋敷1号墳	愛媛	今治市	円	13	横石	III	1	-	未	-	未	未	未	? 未	未	-	59	
高地栗谷1号墳	愛媛	今治市	後円	30	横石	III	1	衡	端環	●	8.5	3.5	22.8	●	兵素	-	61	
高地栗谷1号墳	愛媛	今治市	後円	30	横石	II	2	鏡板	-	●	8.0	2.8	17.8	●	兵素	-	61	
片山7号墳	愛媛	今治市	方?	12	横石	I	8	-	-	-	2.6	-	-	●	円環2	-	62	
治平谷2号墳の2	愛媛	今治市	古墳	-	横石?	-	1+	-	-	-	2.6	-	-	○	-	-	63	
上三谷原古墳	愛媛	伊予市	円	18	横石	II	2	遊環	-	●	8.0	2.8	15.3	●	素環	-	64	
向山2号墳	愛媛	伊予市	古墳	-	横石	II	2	-	-	●	7.2	2.5	不明	○	-	-	64	
大谷古墳	高知	香南市	円	12	横石	II	2	吊遊環	-	●	8.6	2.6	17.4	○	-	-	65	
土師古墳	福岡	桂川町	円	16	横石	I	8	-	-	-	2.0	-	○?	-	-	-	66	
隼人塚古墳	福岡	行橋市	後円	42	横石	III	1	鏡板	-	●	6.6	2.7	12.5	○	-	-	67	

表1 兵庫鎖立聞素環環状鏡板付轡一覧表

古墳名	県名	市町村名	墳形	規模	埋葬	段階	連数	分類	捩等	引手	環幅	立幅	引長	轡	轡種	杏葉	文献
羽根戸N 8号墳	福岡	福岡市	円	20	横石	II	2	遊環	-	-	8.3	3.0	-	○	-	-	68
丸尾 2号墳	福岡	福岡市	円	12	横石	III	1	銜	-	△	7.0	3.4	15.5	○	-	-	69
稻荷山採集遺物	福岡	大任町	横穴墓?	-	横穴墓	III	1	銜	蕨	△	7.2	1.8	17.2	○	-	-	70
稻荷山採集遺物	福岡	大任町	横穴墓?	-	横穴墓	III	1	遊環	-	-	8.7	3.3	-	?	-	-	70
三郎山ST001号墳	佐賀	佐賀市	円	-	横石	III	1	銜	蕨	△	7.1	3.0+	20	○	-	-	71
梅坂古墳群	佐賀	鳥栖市	古墳	-	不明	III	1	鏡板	-	△	未	未	未	○	-	-	71
大杉立山古墳群	佐賀	唐津市	古墳	-	不明	I	長	鏡板	未	-	未	未	未	○	-	-	71
飛山4号横穴墓	大分	大分市	横穴墓	-	横穴墓	III	1	-	-	-	8.7	3.4	-	★	f字	-	72
飛山23号横穴墓	大分	大分市	横穴墓	-	横穴墓	I	6	鏡板	-	■	-	-	-	?	-	-	72
六箱横穴墓群出土	大分	豊後大野市	横穴墓	-	横穴墓	III	1	遊環	-	●	未	未	未	○	-	-	73
城ヶ辻 7号墳	熊本	玉名市	円	9	横石	I	1+	鏡板	-	■	8.1	2.1	18.6	★	内湾	鉄製?	74
湯ノ口17-B号横穴墓	熊本	山鹿市	横穴墓	-	横穴墓	III	1	鏡板	蕨	●	8.1	2.7	13.6	○	-	-	75
四ツ山古墳	熊本	荒尾市	古墳	-	横石	III	1	-	-	-	5.2	2.4	-	○	-	-	75
野原9号墳	熊本	荒尾市	円	12	横石	III	1	銜	蕨	△	7.7	3.9	21.0	●	素環	-	75
才園古墳	熊本	あさぎり町	古墳	-	横石	III	1	銜	蕨	△	6.4	3.0+	15.2	★	f・十	棘	76
塙塚古墳	熊本	阿蘇市	円?	-	横石	III	1	吊	-	-	6.5	1.5	-	★	十梢	三梢	77
久見迫A6号地下式横穴墓	宮崎	えびの市	地下横	-	地下横	I	5	特殊	-	■	9.4	2.4	-	○	-	-	78
島内地下式横穴墓群SK03	宮崎	えびの市	土壇墓	-	馬葬墓	I	5	鏡板	-	■	7.8	2.1	-	○	-	-	79
酒元ノ上6-1地下式横穴墓	宮崎	西都市	地下横	-	地下横	II	2	銜	-	●	未	未	未	?	-	-	80
春日遺跡 9次SK0403	宮崎	新富町	土壇墓	-	馬葬墓	II	2	遊環	-	-	8.4	3.0	不明	○	-	-	81
山崎下ノ原第1遺跡SC8	宮崎	宮崎市	土壇墓	-	馬葬墓	II	2	鏡板	-	△	7.5	3.0	17.0	○	-	-	82
玉田M 6号墳	韓国	陝川	円	10.8	堅石	I	7	鏡板	-	■	7.8	2.1	22.2	○	-	三心	83

※略記

墳形 後円=前方後円墳 円=円墳 方=方墳 造円=造出付円墳 長方形=長方形墳 地下横=地下式横穴墓 古墳=墳形不明

埋葬=埋葬施設 堅石=堅穴式石室 横石=横穴式石室 横木=横穴式木室 木直=木棺直葬 粘土=粘土棺

地下横=地下式横穴墓 馬葬墓=馬埋葬土壇墓

分類 鏡板=無吊金具鏡板介在型 遊環=無吊金具遊環介在型 銜=無吊金具銜介在型 吊鏡板=吊金具付鏡板介在型

吊遊環=吊金具付遊環介在型 吊銜=吊金具付銜介在型 特殊=遊環介在特殊型 吊=吊金具付

捩等 銜・引手の特徴 捩=一条線捩じり 蕨=蕨手引手 端環=端環装飾

引手の種類 ■=別造り引手壺 ●=二字形引手壺 △=直柄引手壺 二=二条線引手

轡 ○=鉄製轡 1点のみ ●=鉄製轡 2点以上 ★=金銅装轡あり

轡種 十梢・十=十字文梢円形鏡板付轡 f字・f=f字形鏡板付轡 複環=複環式円板轡 内湾=内湾梢円形鏡板付轡 瓢形=瓢形環状鏡板付轡

素環=素環環状鏡板付轡 兵素=兵庫鎖立聞素環円環轡 兵小=兵庫鎖付小型矩形立聞円環轡 小型=小型矩形立聞円環轡 大型=大型矩形立聞円環轡

環板=環板轡 円環=環状鏡板付轡(円環轡)

杏葉 双=双葉剣菱形杏葉 剣菱・劍=剣菱形杏葉 三心=三葉文心葉形杏葉 三梢=三葉文梢円形杏葉 鐘形=鐘形杏葉 蕨=棘葉杏葉 鉄製=鉄製杏葉

環幅=鏡板の幅 立幅=兵庫鎖立聞の幅 銜長=銜の長さ 引長=引手の長さ

未=未確認 「-」=不明あるいは「なし」

※小中4号墳に関しては、文献の写真より判断。瓢形環状鏡板付轡の可能性あり。

※土師古墳に関しては、小型矩形立聞環状鏡板付轡の可能性がある。

(図3) 2連を基準に区分し、兵庫鎖3連以上のものを「長連」(註3)、兵庫鎖2連のものを「短連」、1連のものを「単連」とする(註4)。

鏡板介在型 鏡板に銜と引手を連結するもの。岡安光彦氏による「銜・鏡板別連法」に、花谷浩氏による「II式」に該当する(岡安1984、花谷1986。以下同じ)。鏡板介在型には、吊金具を持たないもの(無吊金具鏡板介在型)と吊金具をもつもの(吊金具付鏡板介在型)があり、後者は数例であるが、このタイプの出土数が当該轡の中で最も多く(約4割)、当該轡の主要タイプであることがわかる。前者は長連・短連・単連が確認できる。後者は長連と短連が確認できる。

遊環介在型 銜・鏡板・引手を遊環で連結するもの。岡安氏による「橘金具連結法」、花谷氏による「I式」に該当する。遊環介在型には、無吊金具遊環介在型と吊金具付遊環介在型がある。いずれも長連はなく(註5)、短連、単連のみ確認できる。

銜介在型 銜に鏡板と引手を連結するもの。岡安氏による「銜・鏡板共連法」、花谷氏による「III式」に該当する。無吊金具銜介在型と吊金具付銜介在型があるが、後者は新沢千塚160号墳のみである(註6)。前者

は長連のものは存在せず、短連と単連のみである。新沢160号墳は単連であるが、別造り引手壺付引手(以下、別造り引手壺)を採用するなど、単連のものとしては最も古く位置づけられる。

遊環介在特殊型 遊環介在型が遊環で鏡板・引手・銜を連結するのに対し、特殊型はまず銜に鏡板・遊環を取り付け、遊環には引手を取り付ける。江田船山古墳出土の(無立聞)素環円環轡に採用された連結方法であることから岡安光彦氏により「江田船山型連結法」とされる(岡安1984)が、日本列島で出土する円環轡の一般的な連結方法ではない(註7)。兵庫鎖立聞素環円環轡では、一夜塚古墳、長谷奥古墳、めんぐろ古墳、久見迫A6号地下式横穴墓がある。筆者の集成で日本列島ではこの5例のみである。当タイプは吊金具は伴わず、無吊金具遊環介在特殊型で、長連のみである。

以上のように、小論では無吊金具・吊金具付鏡板介在型、無吊金具・吊金具付遊環介在型、無吊金具・吊金具銜介在型、無吊金具遊環介在特殊型の7種に区分する。

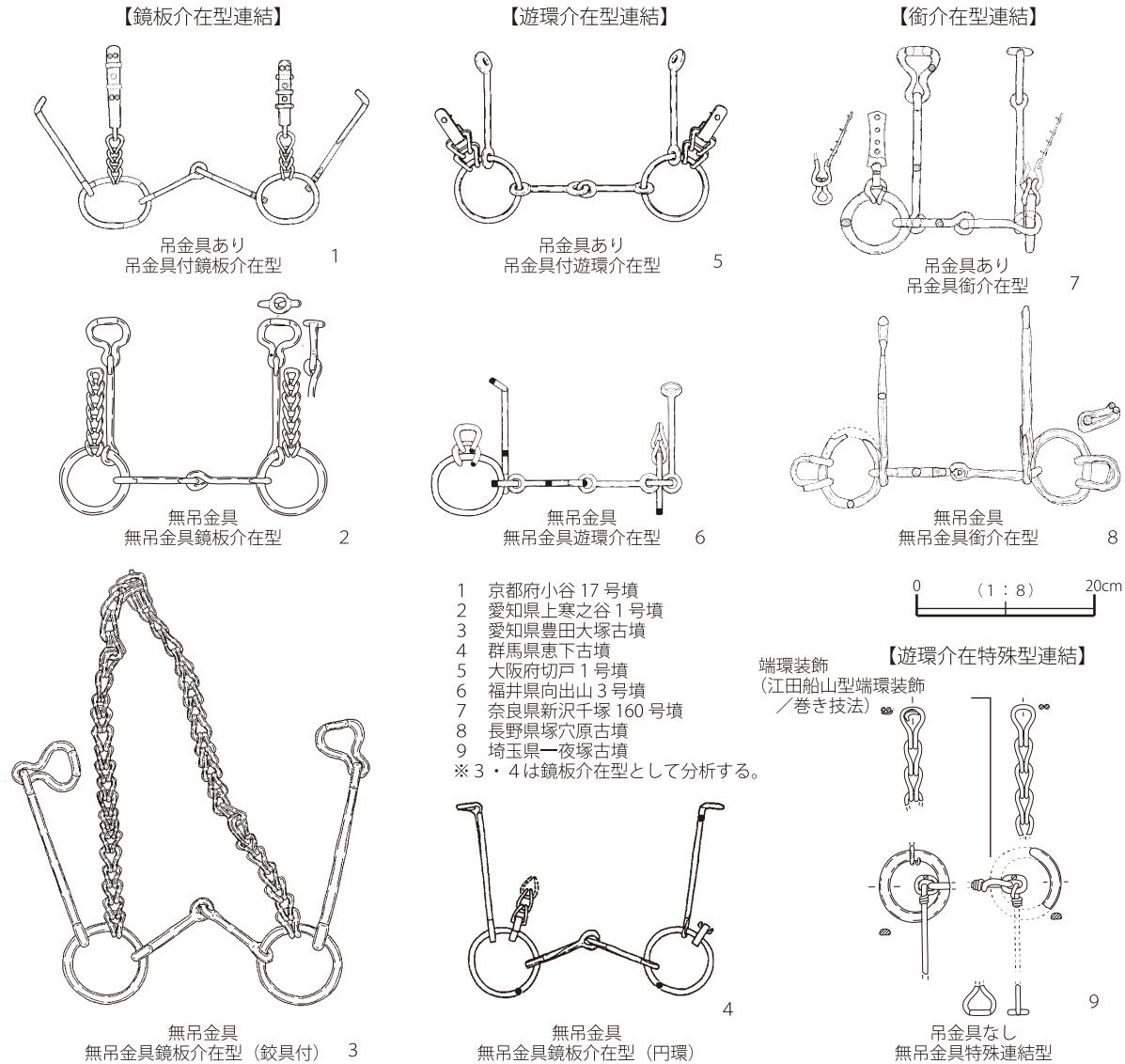


図2 兵庫鎖立聞素環環状鏡板付轡の分類

4 兵庫鎖立聞素環環状鏡板付轡の特徴

(1) 編年

ア 各分類の変遷

ここでは、上記の分類ごとに変遷を確認したい。

鏡板介在型 無吊金具鏡板介在型はMT15型式期の上寒之谷1号墳例、松ヶ洞9号墳例があり、TK10型式以降箱塚4号墳例など類例が増加する。いずれも長連であり、引手は二条線引手（松ヶ洞9号墳）、別造り引手壺、く字形引手が確認できる。前2者がMT15型式期から存在し、後者はTK10型式期から出現するが、TK10段階では別造り引手壺とく字形引手が併存する。一部（TK10～）MT85型式期に遡る可能性があるが、TK43型式に短連がみられるようになり、TK209型式に単連が多くなる（註8）。長連のみ別造り引手壺を使

用されること、単連のものの中に蕨手引手が確認できることから、これまでの研究を参考にすれば、長連が古く、蕨手引手の採用状況から短連よりも単連のほうが新しい傾向にある（図4、岡安1984、田中2011）ことは間違いない。

吊金具付鏡板介在型は、類例数が少ない。丸尾山古墳例がMT15型式に、小谷17号墳・恵下古墳例がTK10型式に位置づけることができる。いずれも長連である。TK43型式に短連の切戸1号墳例を位置づけることができる。吊金具付鏡板介在型は、長連、短連が存在するが、後述するように、長連のものと、短連のものでは、吊金具の形状が異なり、短連の吊金具は遊環介在型で採用されるものと同様であることから、長連の吊金具付鏡板介在型の吊金具が変化したとするよりも、短連

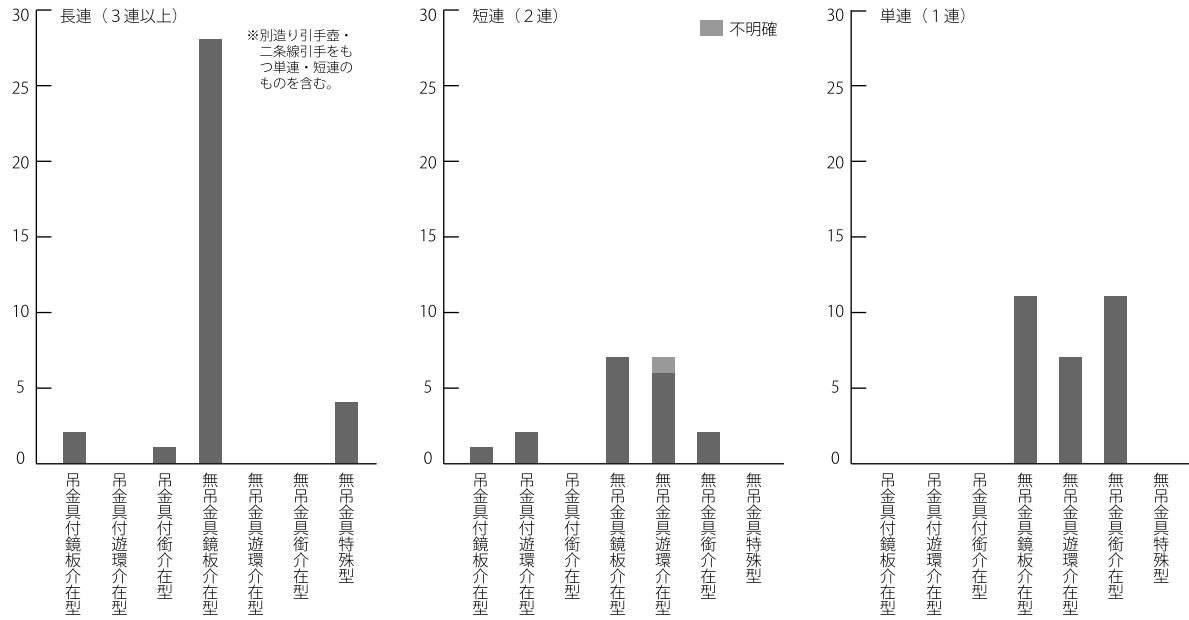


図3 兵庫鎖立間素環環状鏡板付轡の分類別出土数

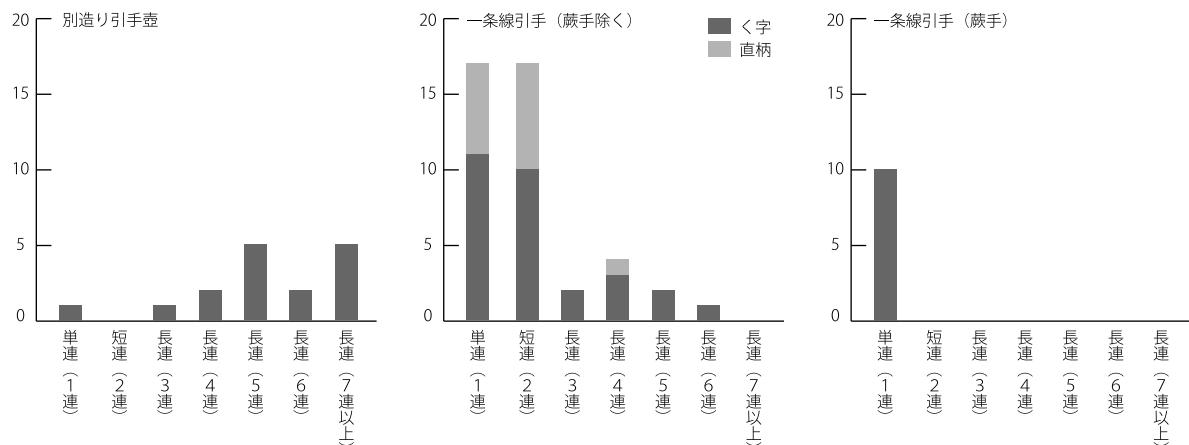


図4 兵庫鎖立間素環環状鏡板付轡の兵庫鎖の連数と引手の相関関係

となる段階で遊環介在型が出現することも考慮すれば系譜関係に変化があったと考えたい。

遊環介在型 無吊金具遊環介在型は長連のものは存在しない。短連の鏡板介在型と同じくTK43型式に、中原4号墳例など短連のものが確認できる。つづくTK209型式に南所3号墳、外輪1号墳例のような単連のものが増加する。

吊金具付遊環介在型は大谷古墳、上野原12号墳でTK43型式期の短連が確認できるが、単連はない。つまり基本的に吊金具が採用されるのは長連・短連のみのTK43型式期までと判断できる。

銜介在型 吊金具付銜介在型は単連+吊金具の新沢千塚160号墳がTK10型式期に位置づけられる。当該例

は別造り引手壺を有するものであり、単連でも新しくはならない。ただし、別造り引手壺を有するものは基本的に長連であることから、修理により短くなった可能性あるいは当該期では唯一の銜介在型であることから兵庫鎖立間素環円環轡出現期の模索的な事例と考える。

無吊金具銜介在型はTK10型式のものは確認できず、つづくTK43型式期に酒元ノ上6-1号地下式横穴墓や大麻町所在古墳例が確認でき、TK209型式期に高地栗谷1号墳や塚穴原古墳例などが確認できる。なお、単連とはいえ新沢千塚160号墳例から連数が増加する短連に展開したとは考え難く、後述するように系譜関係は異なると考える。

遊環介在特殊型 無吊金具の長連のみである。MT15型式期の一夜塚古墳、TK10型式期のめんぐろ古墳・久見追A6号地下式横穴墓、TK10～MT85型式期の長谷奥古墳の4例である。TK43型式以降のものは確認できない。

イ 編年と系譜関係

上述した各型式の特徴を総合すると、下記のような変遷過程と系譜関係を想定できる。

I段階 長連が主体となる時期で、別造り引手壺が主体的に採用される時期であるが、二条線引手、く字形引手壺も併存する。兵庫鎖立聞素環円環轡の出現は、TK47型式に遡る可能性があるもののMT15型式期には確実に出現している。MT15型式に位置づけられるのは長連で鏡板介在型の丸尾山古墳や上寒之谷1号墳、松ヶ洞9号墳、遊環介在特殊型の一夜塚古墳のみである。長連の多くが、TK10(～MT85)型式期に集中する。

この段階は鏡板介在型が大部分であり、当該轡は鏡板介在型を主体に展開した可能性が高く、当該轡の主流型式と認識できる。遊環介在特殊型の4例や、単連の吊金具付銜介在型の新沢千塚160号墳例は、当該轡の主流とは一線を画し、円環轡成立期の試行的、個別的な生産（非主流型式）であったと想定したい。

I段階は、MT15～TK10型式を主体とする時期で、当該轡の創出・発展期であり、鏡板介在型を中心に展開したと考える。

II段階 短連が主体となる時期であり、一部(TK10～)MT85型式期に遡るもののが存在する可能性があるが、多くがTK43型式期に位置づけられる。引き続き鏡板介在型が多いが、この段階で遊環介在型と吊金具銜介在型が出現する。鏡板介在型と遊環介在型がほぼ同数であり、銜介在型は少ない。I段階の主流型式である鏡板介在型の割合が減少し、遊環介在型が出現すること、遊環介在特殊型が姿を消したこと、別造り引手壺や二条線引手がなくなり、く字形・直柄引手のみになることから判断し、この段階で当該轡の生産方針、生産集団に大きな変化があったと想定できる。

また、吊金具付鏡板介在型・遊環介在型は、吊金具がI段階（鉤形）とは異なり、この段階は舌状吊金具を採用する。吊金具の形状変化や遊環介在型の出現などから判断して、I段階からの連続ではなく、主流である鏡板介在型からII段階に短連に変化し、遊環介在型、銜介在型が派生し、それぞれで吊金具が採用されるものは数例生産されたと想定する。

なお、図示していないが、この段階に兵庫鎖の幅が

I段階よりも広くなる（概ね2.5cm未満から2.5cm以上に幅広化）。この段階は、大型矩形立聞円環轡の盛行と同時期であり、兵庫鎖の幅広化は小型矩形円環轡から大型矩形立聞円環轡へと造付立聞系の変化、つまり立聞幅の変化=立間に取り付ける面繋の革帶が太くなつたことと対応する可能性がある。

II段階は時期的に遡るもののが存在する可能性があるがTK43型式期を主体とする段階で、鏡板介在型、遊環介在型を主体に展開し、遊環介在型、銜介在型が派生した。I段階とは、連数の減少とともに複数形態に変化したことから転換期として位置づける。

III段階 単連を主体とする段階で、TK209型式期を中心とする段階である。TK217型式期のものも存在する可能性が高いが、非常に少ない。

当段階は鏡板介在型、遊環介在型、銜介在型が存在するが、銜介在型が増加する。それぞれの前代からの系譜を継いでいるが、吊金具の不採用の観点から考えると変化の方向性が共通していることから近しい工房で生産された可能性が高い。

III段階はTK209型式期を主体とする時期で、吊金具が採用されなくなることや、蕨手引手が採用されるなど、簡略化が進む時期であり、TK217型式期には減少することから、II段階と類似度は大差ないものの、衰退期に位置づけることができる。

系譜関係 繰り返しになるが系譜関係をまとめると、I段階に鏡板介在型を主体に、吊金具付銜介在型、遊環介在特殊型が併存し、II段階には吊金具付銜介在型・遊環介在特殊型が引き継がれることから、II段階はI段階からの連続ではなく、主流となる長連の鏡板介在型から短連の鏡板介在型、遊環介在型、銜介在型が派生し、III段階はII段階のものが連続して展開したと想定する。I段階とII段階に大きな変化（画期）を認めたい。

また、瓢形円環轡は、瓢形鏡板に単連の兵庫鎖を装着する岡山県立坂北1号墳例から判断して、兵庫鎖立聞素環円環轡から派生して（造付立聞円環轡との折衷）TK10型式からMT85型式期に成立した（岡安1984・大谷2008）。瓢形円環轡は成立当初から鏡板介在型、遊環介在型、銜介在型が存在しており、長連の鏡板介在型兵庫鎖立聞素環円環轡から短連の兵庫鎖立聞素環円環轡が成立した状況と類似しており、瓢形円環轡と短連の兵庫鎖立聞素環円環轡の成立が同様の経緯によって成立したと想定できる。ただし、後述するようにその分布は異なり、生産者集団や流通経路が異なる可能

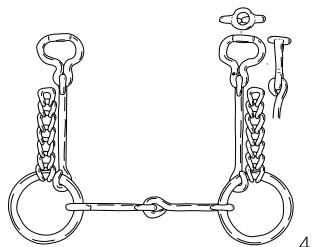
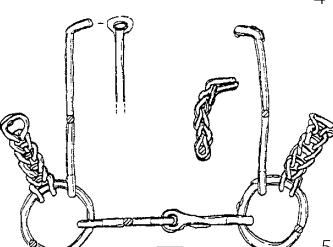
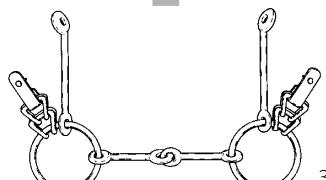
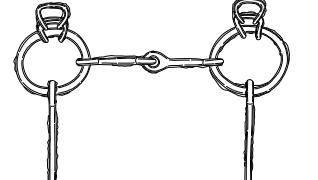
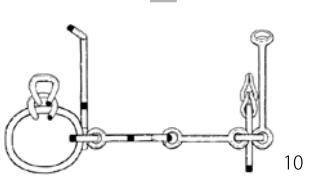
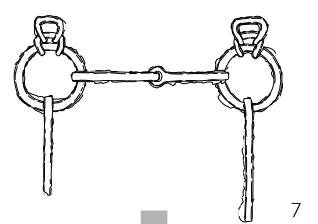
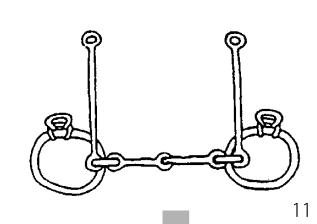
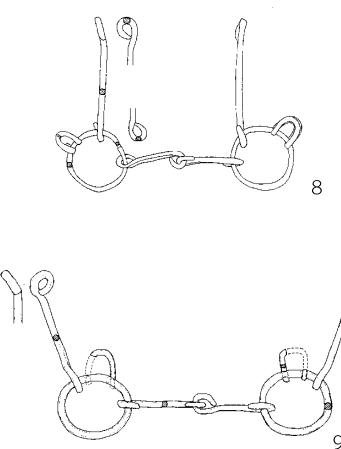
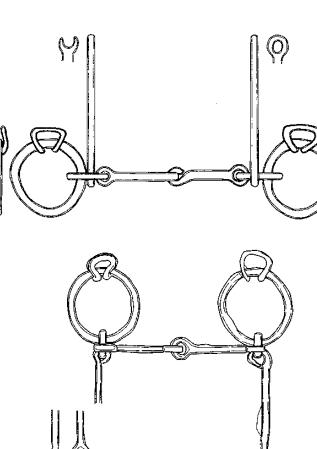
分類 時期	鏡板介在型連結		遊環介在型連結
	吊金具あり	吊金具なし	吊金具なし
一段階	<p>【吊金具付鏡板介在型】</p>  <p>1</p> <p>【無吊金具鏡板介在型】</p>  <p>4</p> <p>2</p>  <p>5</p> <p>系譜異なる</p>		
二段階	 <p>3</p>	 <p>6</p>	 <p>10</p>
三段階	<p>0 (1 : 8) 20cm</p> <p>11のみ縮尺不同</p>	 <p>7</p>	 <p>11</p>
	<p>1 三重県丸尾山古墳 2 京都府小谷 17号墳 3 大阪府切戸 1号墳 4 愛知県上寒之谷 1号墳 (復原) 5 兵庫県箱塚 4号墳 6 静岡県中原 4号墳 7 愛知県稻荷山 1号墳 8 埼玉県黒田 1号墳 9 栃木県星の宮神社古墳 10 福井県向出山 3号墳 11 大阪府山畠 22号墳 12 兵庫県南所 3号墳 13 滋賀県外輪 1号墳</p>	 <p>8</p>	 <p>12</p>

図5-1 兵庫鎖立間素環環状鏡板付巻の変遷1

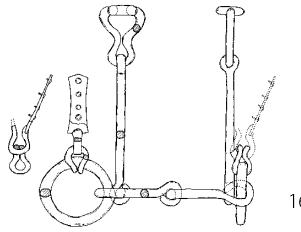
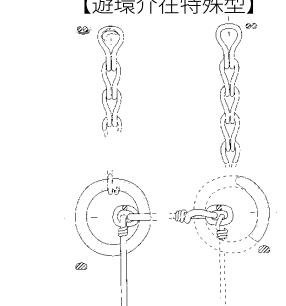
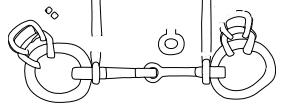
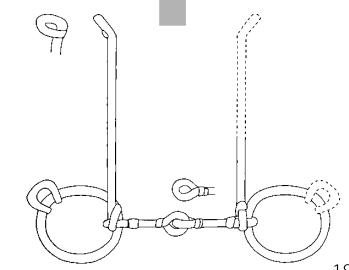
遊環介在型連結	銜介在型連結	遊環介在特殊型連結	分類 時期
吊金具あり	吊金具あり／吊金具なし	吊金具なし	
別造り引手壺・く字形引手が主体 兵庫鎖長連の盛行	【吊金具付銜介在型】  16 連続しない	【遊環介在特殊型】  20 21 22 23 衰退	I段階
【吊金具付遊環介在型】	【無吊金具銜介在型】  17 14 15 衰退	別造り引手壺の不採用 兵庫鎖連数の減少 (長連の衰退／短連の盛行) 遊環介在型・銜介在型が増加	II段階
	 18 19	蕨手引手が出現 一条線捩引手が出現 兵庫鎖単連の盛行	III段階
		<p>14 柄木県上野原 12 号墳 15 高知県大谷古墳 16 奈良県新沢 160 号墳 17 徳島県大麻町所在古墳 18 愛媛県高地栗谷 1 号墳 19 長野県塚穴原古墳 20 埼玉県一ヶ塚古墳 21 宮崎県久見追 A 6 号地下式横穴墓 22 島根県めんぐろ古墳 23 愛媛県長谷奥古墳</p>	

図5-2 兵庫鎖立間素環環状鏡板付巻の変遷2

性が高い。

(2) 時空間分布

ア 時期ごとの分布

小論で分類したタイプごとに分布の比較をすることが必要であるが、各段階ともに特定のタイプが集中する地域はないため、兵庫鎖立聞素環円環轡すべての種類をまとめて各段階の分布をみたい（図6・7）。

I段階 日本列島では、東は栃木県小野巣根4号墳から西は宮崎県久見迫A6号地下式横穴墓、熊本県塙塚古墳まで出土し、韓半島では玉田M6号墳で確認される。日本列島では東日本にも確認できるが、西日本に多い傾向にある。特に京都（6例）、岡山・愛知（4例）、愛媛（3例）に多い。また、全時期を通じて東北では当該轡は確認されていない。

II段階 II段階以降日本列島のみで出土する。栃木県上野原12号墳から宮崎県酒元ノ上6-1号地下式横穴墓まで出土するが、I段階と比較して出土傾向が若干変化する。I段階で3例以上が出土した京都、岡山、愛知—特に京都から山口では確認されない—では数量が減少する一方で、愛媛、宮崎ではその数量が増加する。宮崎では分布地域に変化がみられるなど、I段階と比較して分布傾向に変化が確認できることから、I段階とII段階には上述した変遷の画期だけではなく、流通の変化も同時に継起した可能性が高い。

III段階 栃木県星の宮神社古墳から熊本県湯ノ口17-B号横穴墓まで分布する。全国的に散在する傾向にあるが、やや集中する地域が確認できる。愛媛ではI・II段階について多い。II段階と比較して福岡・熊本で増加し、京都から山口の山陰山陽でまた確認されるようになる。一方、II段階にやや集中した宮崎では減少する。II段階と比較して九州で増加していることや愛媛で引き続き多いことが特徴である。

イ 特徴的な分布

吉備と伊予 長連（I段階）は岡山・愛媛で両地域ともやや集中するが、短連・単連（II・III段階）に分布の差異が確認できる。岡山では、1~2例となるが、愛媛は長連と同様4例以上の出土があり、未確認のものを含めれば、10例以上が集中する可能性が高い。

一方、この段階に特徴的な分布をみせる円環轡がある。瓢形円環轡である（図8）。岡山では、この段階に造付立聞円環轡よりも瓢形円環轡が集中する。筆者はこの集中傾向と各段階のものが存在することから瓢形円環轡の生産が吉備で行われた可能性を想定し、鍛冶

技術と関連して各地にもたらされた可能性を想定した（大谷2008）。伊予でも鍛冶関連遺物が出土する古墳が多く、瓢形も吉備に次いで集中する地域であるため、吉備との関連性が考えられる。

では、瓢形円環轡が集中する両地域でのII段階以降兵庫鎖立聞素環円環轡の分布差は何に起因するのか。

この課題に関して、筆者は下記のように想定する。吉備でII段階以降、瓢形円環轡が兵庫鎖立聞素環円環轡から派生し生産され、流通しているため、同様の職掌や出自（鍛冶関連技術保有集団）によってもたらされる兵庫鎖立聞素環円環轡は必要ない。一方、伊予では、瓢形も兵庫鎖立聞素環円環轡も生産せず、同じ職掌や出自をもつ集団が両者を受け入れ続けた。このため岡山と愛媛での分布の大きな差異が生まれた。

兵庫鎖立聞素環円環轡と瓢形円環轡 岡山・愛媛以外の地域では散在する傾向にあるが、福岡・兵庫では兵庫鎖立聞素環円環轡・瓢形円環轡の両者ともに多く出土する。また、瓢形円環轡がやや多く分布する栃木、長野、愛知、岐阜には兵庫鎖立聞素環円環轡も継続的に副葬され、埼玉県黒田古墳群、岐阜県大牧1号墳で瓢形、兵庫鎖立聞素環円環轡の両者が共伴するなど、瓢形円環轡で想定したように、鍛冶技術と関連して各地にもたらされたと想定する。ただし、上述したように岡山で瓢形円環轡が増加するII段階以降減少することから、瓢形と兵庫鎖立聞素環円環轡は、関連をもつても、別主体によって生産・配布（供給）された可能性が高い。

5 兵庫鎖立聞素環状鏡板付轡の特質

（1）兵庫鎖立聞素環状鏡板付轡の成立

小論を閉じるにあたり、当該轡がどのような社会背景により成立したのか、そして変遷したのかを分析し、筆者の考えを述べたい。

まず、当該轡の成立について検討したい。

ア 日本列島と韓半島での構成要素の比較

MT15型式期までに当該轡が成立するが、MT15～TK10型式期には、鏡板介在型を主体としながらも、I段階には遊環介在特殊型や銜介在型も数例存在する。さらに、鏡板介在型にも、鏡板に捩りが加えられるもの（船来山O264号墳）や二条線引手のもの（松ヶ洞9号墳）があり、多数の属性を組み合わせることで当該轡が成立したことが想定できる。

それでは、日本列島内で最も早く出土する円環轡のひとつである兵庫鎖立聞素環円環轡がどのような成立

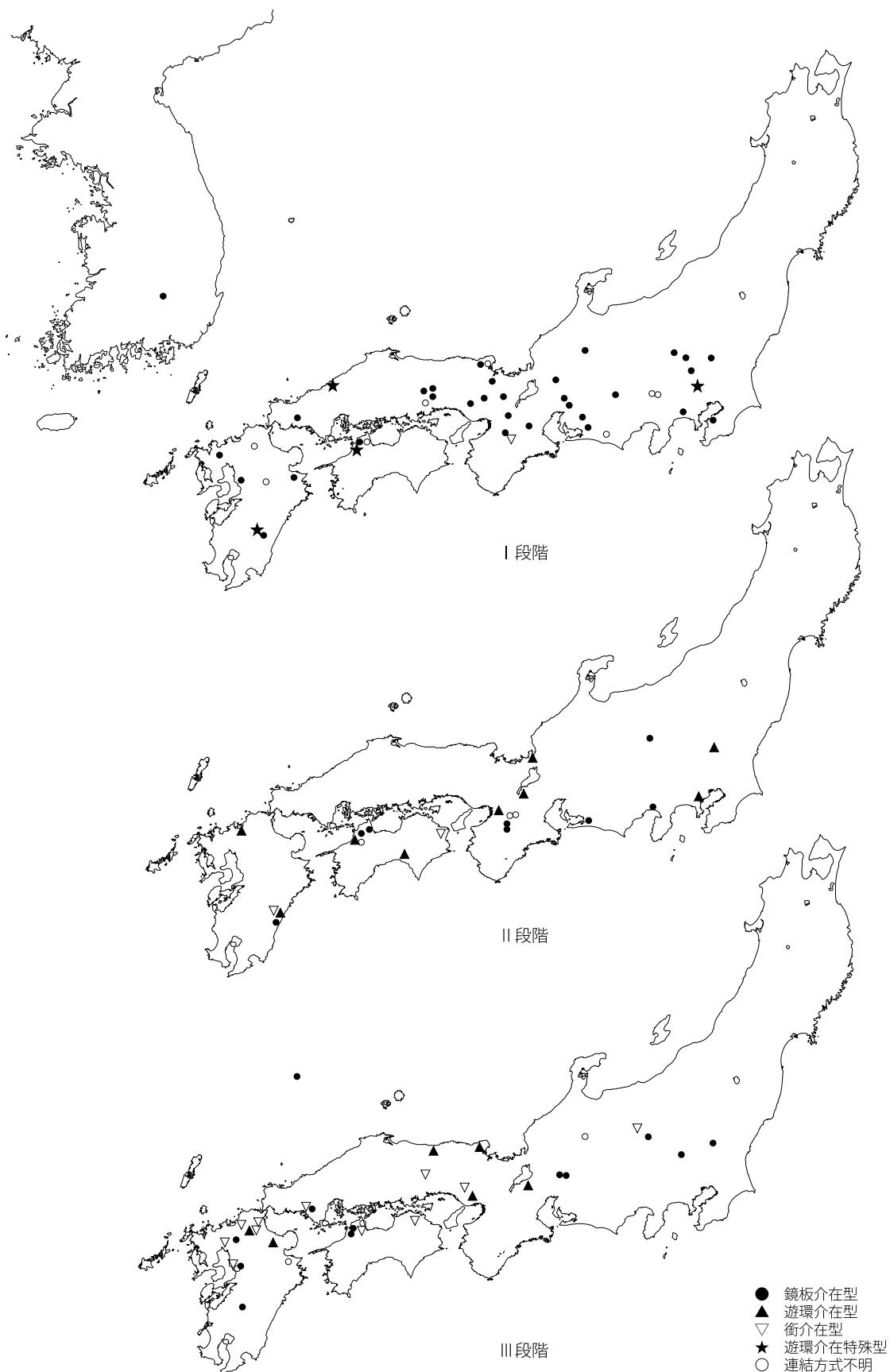


図6 兵庫鎖立間素環環状鏡板付巻の段階別分布

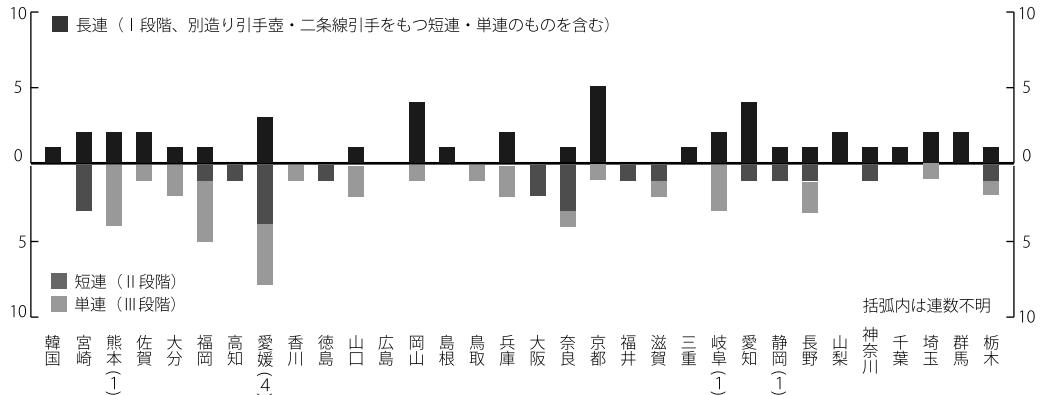


図7 兵庫鎖立間素環状鏡板付轡の段階・地域別出土数

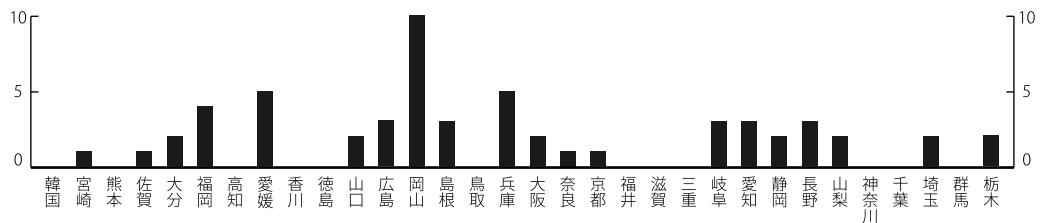


図8 瓢形環状鏡板付轡の地域別出土数

過程をへるのか？

円環轡は、韓半島で5世紀後半に遡るもののが確認されており、その成立自体は韓半島であった可能性が高い。そこで当該轡の成立過程を探るため韓半島で確認される円環轡とその要素を有する日本列島で出土した円環轡を比較したものが図9である。

韓半島（図9左）と日本列島（図9右）の事例を比較すると、兵庫鎖立間素環円環轡の各要素は、韓半島にも日本列島にも存在することがわかる。

二条線引手は百済地域の論山茅村里4号墳（百済文化開発研他1994。無立間素環。以下韓国の事例は玉田M6号墳（表1文献）例を除いて無立間素環円環轡）や新羅地域の梁山夫婦塚（朝鮮総督府編1927）、伽耶の固城内山里21-1号墳（昌原文化財研2005）で確認される。一方、日本列島では熊本県江田船山古墳（無立間素環）や松ヶ洞9号墳（兵庫鎖立間素環）で出土している。

遊環介在特殊型は、韓半島では論山茅村里4号墳、晋州加佐洞1号墳（慶尚大博1989）、日本列島では江田船山古墳（無立間素環）と兵庫鎖立間素環円環轡の一例が確認できる。

鏡板を捩じるものは、松鶴洞1A-11号墳（張2005）や内山里21-1号墳など韓国固城地域に存在する。一方、日本列島では、兵庫鎖立間素環円環轡の船来山O264号墳が鏡板を捩るものである。

銘介在型は、韓半島では論山茅村里5号墳（百済文化開発研他1994）、咸安末山里451-1号墳（桃崎2005）で、日本列島では福岡県稻童8号墳（無立間素環、行橋市2005）、奈良県新沢千塚160号墳（兵庫鎖立間素環）で確認される。無立間素環では類例数は多いため、無立間素環の主流型式であるが、兵庫鎖立間素環円環轡ではこの事例のみであり、主流型式ではない。ここに日本列島内の無立間素環と兵庫鎖立間素環円環轡の差異が確認できる。

鏡板介在型の円環轡は韓半島には少なく、固城松鶴洞1A-8号墳（張2005）や陜川玉田M6号墳のみである。日本列島では、無立間素環（福岡県釣崎3号墳など）、兵庫鎖素環（上寒之谷1号墳）に類例数が多く、主流型式として認識できる。

遊環介在型は、韓半島では普州玉峰7号墳（福泉博2015）のみで、日本列島では福岡県正籠3号墳（宇美町1980）など無立間素環で数例確認されるのみ（註9）で、主体的に採用されておらず、兵庫鎖立間素環円環轡ではI段階には確認されない。

後述するが、兵庫鎖の立間への採用は韓国では陜川玉田M6号墳のみである一方で、日本列島では兵庫鎖立間素環円環轡、兵庫鎖付小型矩形立間円環轡、兵庫鎖付内湾槽円形鏡板付轡、複環式円板轡で採用される。

以上、韓半島と日本列島の事例を比較したが、時期差はあるものの、日本列島と韓半島で同様の要素を有

	百濟／新羅	朝鮮半島	伽耶	日本列島
二条線引手 遊環介在特殊型				<p>無立間素環 兵庫鎖立間素環 鏡板介在型 非主流型式 10 11 12 13 14 15</p>
振り環 (鏡板)				<p>16 17 18</p>
銜介在型				<p>6 7</p>
鏡板介在型 兵庫鎖立間素環				<p>8 9 10 11 12 13 14 15 16 17</p>
遊環介在型			兵庫鎖立間素環円環巻の成立と深い関係のある要素	<p>18</p>
		晋州玉峯7号墳		<p>10 11 12 13 14 15 16 17 18</p>
		0 (1 : 8) 20cm		
	1 梁山夫婦塚 4 固城松鶴洞1A-11号墳 6 論山茅村里5号墳 8 固城松鶴洞1A-8号墳	2 論山茅村里4号墳 5 固城内山里21-1号墳 7 咸安末山里451-1号墳 9 陝川玉田M6号墳	3 晋州加佐洞1号墳	10 熊本県江田船山古墳 12 埼玉県一夜塚古墳 14 福岡県稻堂8号墳 16 福岡県釘崎3号墳 18 福岡県正籠3号墳
	11 愛知県松ヶ洞9号墳 13 岐阜県船来山O264号墳 15 奈良県新沢千塚164号墳 17 愛知県上寒之谷1号墳			

図9 兵庫鎖立間素環環状鏡板付巻成立期における属性についての日韓比較

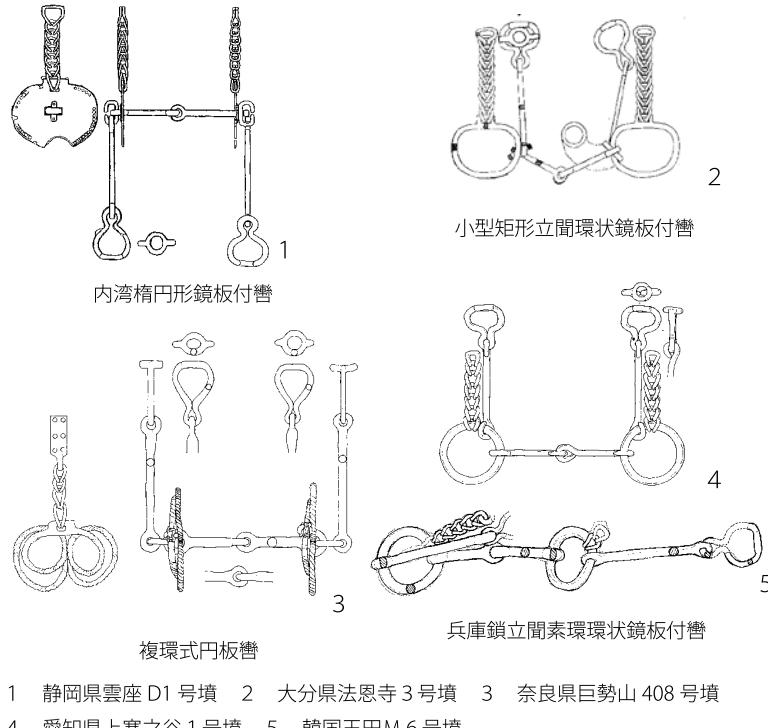


図10 兵庫鎖を採用する鉄製轡

する円環轡が5世紀後半から6世紀前半に存在する。特に兵庫鎖立聞素環円環轡の属性の一部は百濟地域や新羅地域でも確認されるが、ほぼすべての属性が伽耶地域で確認できる。兵庫鎖立聞素環円環轡の成立にあたって伽耶地域の影響があることが想定できる。特に成立期に存在する鏡板介在型、銜介在型、捩り環など複数の要素が固城地域で確認でき、その成立は固城地域に轡を供給した集団との強い関係が想定できる。

一方、成立期に存在する遊環介在特殊型の属性も韓半島の百濟地域、伽耶地域で確認できる。晋州（連結方法）、咸安（断面が長方形の鏡板）などが確認できる。鏡板介在型とは若干分布域が異なるため、鏡板介在型とは成立過程（工人集団）が異なる可能性がある。

いずれにせよ、日本列島で出土する無立聞素環円環轡と共に通性が指摘される（田中2015）円環轡が出土する固城、咸安などで兵庫鎖立聞素環円環轡の各要素が確認されていることは重要である。

イ 兵庫鎖の立聞への採用

上述したように兵庫鎖立聞素環円環轡の要素は、韓半島でも存在しているが、組合立聞をもつもの、つまり兵庫鎖立聞を採用するのは玉田M6号墳のみである。日本列島では、ここで取り上げた兵庫鎖立聞素環円環轡をはじめ6世紀前半の鉄製内湾橢円形鏡板付轡、兵庫鎖付小型矩形立聞円環轡、複環式円板轡で採用され

た（図10）。

一方、金銅装轡では長野県竹原 笹塚古墳（長野県1988）、静岡県松長6号墳（沼津市2015）、福井県漆谷1号墳（福井県埋文センター2008）で採用されている。しかし、松長6号墳例は修理された内湾橢円形鏡板付轡、漆谷1号墳例は剣菱形杏葉を轡に改変したものであり、修理時に兵庫鎖が採用された可能性が高い。基本的には金銅装轡は吊金具を伴うことが一般的であることから、竹原 笹塚古墳例も修理によるか、あるいは特殊な事例と判断できる（大谷2016a）。

つまり兵庫鎖は日本列島で金銅装轡ではなく、鉄製轡で広く採用されたものと判断できる。ここでは兵庫鎖立聞素環円環轡の系譜を探るため兵庫鎖を採用した3種の鉄製轡と簡単に比較したい。

兵庫鎖付小型矩形立聞円環轡との比較 兵庫鎖付小型矩形立聞円環轡は、出現当初から三ツ山古墳（豊橋市2000）等の鏡板介在型と中宮1号墳（近藤編1952）等の遊環介在型の2者が併存する（大谷2016a）。

一方、兵庫鎖立聞素環円環轡は、上述したように成立期は長連の鏡板介在型が主体で、短連の段階で遊環介在型が出現する。したがって、成立期には造付立聞と組合立聞という違いや、連結方法の種類の違いにより直接的な関係は強くないと考える。

鉄製内湾橢円形鏡板付轡との比較 兵庫鎖が採用される鉄製内湾橢円形鏡板付轡は遊環介在型が一般的であるが、兵庫鎖立聞素環円環轡は遊環介在型が成立期には存在しない。鏡板の種類の差異、連結方法の差異があることから直接的な関係は強くない。

複環式円板轡との比較 複環式円板轡は、日本列島、韓半島の両者で出土するが、滝沢誠氏（滝沢1992）、諫早直人氏（諫早2012）の研究により、兵庫鎖を立聞に取り付けるものは日本列島でのみ出土することが明らかになった。鏡板の形状が異なり、兵庫鎖立聞素環円環轡の主体となる鏡板介在型は存在しておらず、この轡との直接的な関連性は低い。

4種の兵庫鎖を採用する鉄製轡の意義 したがって、兵庫鎖を採用する鉄製轡が4種類確認できるが、鏡板

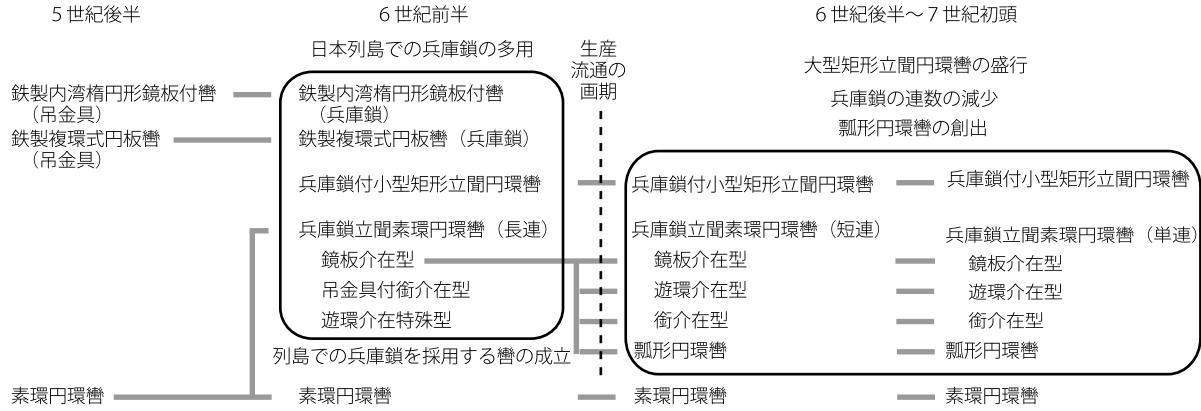


図11 兵庫鎖立間素環円環轡の成立と展開

の種類、轡の連結方法の差異、組合立間と造付立間の違いなどがあり、直接的な系譜関係を窺うことは難しいが、同時期にこのような違いを超えて兵庫鎖が採用されたことに意味がある（註10）。

ウ 兵庫鎖立間素環円環轡の成立背景

以上、ア・イで、兵庫鎖立間素環円環轡の属性の日韓比較、兵庫鎖を採用する轡との比較を行った。韓半島にすべての要素が存在することから、韓半島で生産され、日本列島にもたらされたと判断する研究者もいると想定する。一方で、日本列島の兵庫鎖立間素環円環轡は鏡板介在型が主体で、韓半島では鏡板介在型の素環円環轡は少ない点、兵庫鎖を立間に使用する鉄製轡が日本列島で同時期に出現し、多数確認される点を考慮すれば、一概に韓半島から日本列島にもたらされたと断定することは難しい。韓半島で6世紀以降馬具の副葬が激減することから、実際に存在したものが出土していない可能性は排除できないが、筆者は以下のように日本列島で成立したと考える。

日本列島では、I段階、6世紀前半に兵庫鎖立間素環円環轡だけではなく、兵庫鎖付小型矩形立間円環轡、兵庫鎖付内湾槽円形鏡板付轡、兵庫鎖付複環式円板轡が存在する。前二者はこの段階で新たに生産が開始される轡、後二者は5世紀段階からの立間に取り付けられる金具が吊金具から兵庫鎖への変化を遂げる。

鈴木一有氏が6世紀前半段階に内湾槽円形鏡板付轡の形状が変化し、兵庫鎖が採用されることを指摘し、兵庫鎖を有するものが韓半島に確認されていないことから兵庫鎖付内湾槽円形鏡板付轡を国産と想定する（鈴木2002）。日本列島では複数の種類で兵庫鎖が同時に轡種を超えて採用され、流行することを鑑みて、日本列島で独自に複数轡種に一斉に兵庫鎖を取り入れることで成立したと想定する。兵庫鎖立間素環円環轡はも

ちろん韓半島、特に伽耶（なかでも固城・咸安地域）との深い関連をもつことから、渡来工人等の関与も想定しなければならないが、鉄製轡4種が同時期に導入された点は、それぞれの生産集団が別々に採用したとは考えにくい。では、同時に採用される経緯はなにか？

田中由理氏は、f字形鏡板付轡や内湾槽円形鏡板付轡を分析するなかで6世紀前半に両者の形態が日本独自のものに変化し、さらに形状やサイズが近いことから規格化が進行していることを論じ、この分析をもとに、馬具の規格化は倭王権主導によって行われ、規格によって階層差を示す「秩序形成型」馬具が創出されたとする。

福永伸哉氏は、6世紀前半に金銅装槽円形鏡板付轡が採用され広く古墳に副葬され始める事と、f字形鏡板付轡（連結が内接）や内湾槽円形鏡板付轡（兵庫鎖の採用）など轡の変化が確認できることに関して、新たな種類の轡をはじめとする馬具を導入するとともに、5世紀後半段階と同じ形式を生産するにしても、細部を変更することで前政権との変化をつけ、6世紀前半代の王権「繼体朝」が倭王権の内部変化を表徴したとする（福永2005）。

両氏の論述をもとに兵庫鎖立間素環円環轡の成立を考えると、6世紀前半のf字形鏡板付轡の生産の再編や十字文槽円形鏡板付轡の生産に合わせて、倭王権主導のもとに兵庫鎖を鉄製轡に採用することが指向される。その結果、韓半島に起源をもつ鉄製内湾槽円形鏡板付轡や複環式円板轡の細部変更（兵庫鎖の採用）が行われ、併せて韓半島に存在する円環轡に兵庫鎖を付け加えて新たな形式である兵庫鎖立間素環円環轡と、素環鏡板に造付立間を取り付ける日本独自の兵庫鎖付小型矩形立間円環轡が創出されたと想定したい（図11）。また、基本的に鉄製轡に限定して兵庫鎖を用い

ることで、吊金具を用いる金銅装馬具と仕様による差別化したと想定したい（註11、大谷2016a）。

なお、MT15～TK10型式期に東海地方では豊田大塚古墳など十字文橋円形鏡板付轡と共に伴する事例があることを確認した（大谷2006）が、全国的にも塙塚古墳など7例が確認できる。一方、f字形鏡板付轡と共に伴するのは4例であり、若干十字文橋円形鏡板付轡との共伴率が高い。この点から新たに創出された十字文橋円形鏡板付轡とともに兵庫鎖立聞素環円環轡が配布された可能性も想定したい。

（2）兵庫鎖立聞素環環状鏡板轡変遷の背景

つづいて、第4章でII段階にI段階からの系譜関係が変化すると想定したが、II・III段階の変化にどのような意義を見出すことができるか。

II段階の変化 兵庫鎖が短連になるII段階で、別造り引手壺の採用が衰退する。また、同時期に兵庫鎖付小型矩形立聞円環轡も兵庫鎖の連数が減少する（岡安1984など）。さらに、5世紀後半代から連続していた鉄製内湾橋円形鏡板付轡や複環式円板轡は衰退する。したがって、この段階には鉄製轡生産において大きな画期を認定できる（図11）。

I段階における兵庫鎖を有する鉄製轡4種類の分析で想定したように、この4種類の生産集団は異なると想定されるが、兵庫鎖連数の減少が複数の鉄製轡で共通することは、鉄製轡の変遷がある程度方向性をもって規制されていた可能性も想定しておくべきだろう。

また、I段階からII段階にかけて瓢形円環轡が兵庫鎖立聞円環轡から派生した可能性が高いが、大型矩形立聞円環轡の盛行、銃具造立聞円環轡の創出（岡安1984・花谷1986）もこの段階であり、兵庫鎖立聞素環円環轡の兵庫鎖の連数の減少、鏡板介在型から遊環介在型、銜介在型が展開することなど、同形式の轡にも大きな変化が起こる。瓢形円環轡の分析で論じたように（大谷2008）、この段階で鉄製轡生産集団の統合、再編が行われた可能性が高い。

III段階の変化 III段階は単連となる段階であるが、II段階から引き継がれ、鏡板介在型、遊環介在型は同時期に吊金具付のものが失われることから、轡の型式は違えども、近しい工房で生産された可能性が高い。

また、この段階には、造付立聞系の立聞が壊れたのを修復するため、単連の兵庫鎖を装着することで、修復・補強している事例がある。前者は愛媛県四ツ手山古墳（愛媛県埋文センター1984）や福岡県本郷鷺塚1

号墳（大刀洗町1994）であり、後者は福岡県宇野台1号墳（新吉富村1990）や大分県上ノ原38号横穴墓例（大分県1991）である。単連の兵庫鎖を用いて補強・修復することから想像をたくましくすれば、素環円環轡に単連兵庫鎖を組み合わせることで兵庫鎖立聞素環円環轡に変更することも可能となるため、この段階に九州や四国で兵庫鎖立聞素環円環轡の一部が生産されていた可能性も想定できる。また、短連（2連）までは兵庫鎖であることが意識されたが、単連になった段階で、外見上は大型矩形立聞と同じ形態になった。兵庫鎖立聞でありながら、ほぼ大型矩形と同様の形態になったことで銜介在型が増加する要因になったと考えられはしないか。

今後分析を進める必要があるが、III段階への変化にも鉄製轡生産に変化が起きていた可能性が高い。

（3）兵庫鎖立聞素環環状鏡板付轡の意義

これまでの分析結果をまとめておわりとしたい。

兵庫鎖立聞円環轡を轡の連結方法により、鏡板介在型、遊環介在型、銜介在型、遊環介在特殊型に大きく区分し、それらを兵庫鎖の連数によりさらに長連、短連、単連に細分し、長連から短連、単連へと変遷することを論じた。また、長連段階には鏡板介在型、吊金具付銜介在型、遊環介在特殊型が存在するが、鏡板介在型が主体であり、この型式を主体に展開すると考えた。短連になるII段階には鏡板介在型から遊環介在型、銜介在型が派生し、それと関連して瓢形円環轡が創出されたことを論じた。単連となるIII段階は、II段階から連続するが、兵庫鎖の単連を補強や修復で使用する事例が九州や四国で確認できることから、一部地方生産された可能性も想定できる。

つぎに、兵庫鎖立聞素環円環轡の成立に関して、韓半島との属性の比較を通じて、すべての要素が韓半島で確認されるため、その成立にあたっては韓半島、特に伽耶地域（固城地域など南部）の影響が確認できる。ただし、韓半島では兵庫鎖を使用する鉄製轡は上記4種の中で兵庫鎖立聞素環円環轡1点だけである。また、兵庫鎖立聞素環円環轡が出現・盛行する6世紀前半は、鉄製内湾橋円形鏡板付轡・複環式円板轡で5世紀後半代の吊金具の多用から一転して兵庫鎖が採用され、兵庫鎖付小型矩形立聞円環轡という日本独自の造付立聞円環轡が創出されるなど、同時期に兵庫鎖を採用する鉄製轡が日本列島で盛行する。韓半島での希少性、日本列島での盛行から判断して兵庫鎖立聞素環円環轡は

韓半島の影響を受けながら、日本列島で創出されたと想定した。その創出は、5世紀段階の馬具生産を引き継ぎながらも、新たな要素への変更や新たな轡形式の導入など倭王権により主導されたと想定した。

また、兵庫鎖立聞素環円環轡の分布や展開過程から考えると、鍛冶集団のつながりによりもたらされたと想定される瓢形円環轡を派生させていることから、当該轡もII段階以降鍛冶技術を有する集団に流通した可能性を想定するとともに、愛媛県と岡山県の分布数の時期別の違いから、II段階以降、兵庫鎖立聞素環円環轡と瓢形円環轡が同様の職掌により展開したとすれば、吉備は独自で生産したものが流通するため兵庫鎖立聞素環円環轡は分布数が激減する一方、愛媛県は兵庫鎖立聞素環円環轡・瓢形円環轡の両者が供給された可能性を想定した。

謝辞

兵庫鎖立聞素環円環轡の類例について、栗林誠治氏、村上恭通氏、宮代栄一氏の御教授いただきました。また、鈴木一有氏には、貴重な所蔵図書をご貸与いただきとともに、類例等をご教授いただき、さらに韓国の古墳について有益な御教授をいただきました。さらに、富士市教育委員会石川武男氏、佐藤祐樹氏、藤村翔氏には、中原4号墳の資料調査について便宜を図っていただきました。ここに明記して深謝いたします。

註

1 花谷浩氏は素環鏡板に小型の円環を取り付け、その円環に兵庫鎖を取り付けるものを円環立聞として別分類とするが（花谷1986）、鏡板が素環で、兵庫鎖を取り付けるという発想は同一であることから、小論では兵庫鎖立聞の一種として取り扱う。

また、花谷氏は、兵家11号墳例（表1文献35。以下兵庫鎖立聞素環円環轡の引用文献は表1の各文献を参照願いたい）が兵庫鎖ではなく、U字形金具を素環鏡板に取り付けることから、U字形立聞として区分しているが、形状は1連の兵庫鎖と同様であることから、今回は集成に含めている。なお、花谷氏は塚穴原1号墳例をU字形金具とする（花谷1986）が、1連の兵庫鎖立聞素環円環轡であることから、現状で兵家11号墳と同様の事例は確認できない。

2 大蔵経寺山無名墳及び吉備塚古墳出土例は円環に兵庫鎖を取り付けており、兵庫鎖立聞素環円環轡に類似するため今回の集成に含める。ただし、衡・引手が確認できないこと—特に吉備塚古墳は木棺直葬であるが、衡・引手が出土していない、同形態のものが3点ずつ存在することから、兵庫鎖立聞素環円環轡が2組副葬され、そ

の2組ともに衡・引手が失われ、さらに2組のうちの1組の片方の鏡板のみ遺失したと考えられなくもないが、偶然にも複数例でこのような状況になるとは考え難い。したがって、両古墳の事例は当該轡の可能性は排除できないが、杏葉として3点吊り下げられたか、環状雲珠・辻金具として利用された、あるいは馬具ではない可能性も想定したい。

3 長連では21連の豊田大塚古墳が最長であるが、10連を越えるものは当該例のみであり、長連は10例以下であるものが通例である。それぞれの出土数は21連が1例、10連1例、8連4例、7連1例、6連3例、5連8例以上、4連6例、3連8例以上である。一方、短連21例以上、単連34例以上である。

なお、長連で最長の21連の兵庫鎖を連ねる豊田大塚古墳例は、途中で兵庫鎖のつなぎ方が上下逆転する部分があることから、兵庫鎖を継ぎ足している可能性がある。このため当初は10連前後であった可能性も排除できない。

また、岡安光彦氏が区分した「襲連」は、山畠22号墳例のみであること、外見は2連であることから短連に含める。

4 兵庫鎖1つのものを「鎖」あるいは「連」と表現するのは不適切であるが、岡安光彦氏や花谷浩氏の定義に従い、便宜的に鎖1連のものを「単連」とする（岡安1984、花谷1986）。

5 宮崎県久見迫A6号地下式横穴墓例は、報告書（表1文献78の宮崎県1972）では、遊環介在型として表現されるが、当該轡を調査された宮代栄一氏のご教授により後述する「遊環介在特殊型」であることが判明した。したがって、報告書の図を用いて花谷浩氏が分類したa類I式—本論での長連の遊環介在型—は存在しない。

6 新沢千塚160号墳例と同様単連の兵庫鎖に吊金具を装着するものは、熊本県塙塚古墳に確認できる。時期も同時期であり、このタイプに分類できるものが複数存在する可能性がある。

7 韓半島では、論山茅村里4号墳（百濟文化開発研ほか1994）や晋州加佐洞1号墳（慶尚大博1989）などで確認されており、必ずしも日本列島独自の連結方法ではない。また、茅村里4号墳は江田船山古墳例よりも若干古い可能性が高い。したがって、当該連結方法を「江田船山型」とするのは複数例が確認された現状では妥当ではない。別の呼称を用いた方がよいが適當な分類名が思い浮かばないため、「遊環介在特殊型（連結）」とする。

なお、本論とはずれるが、この「遊環介在特殊型」の、衡先環にまず鏡板と遊環を連結し、その遊環に引手を連結する方法は、板状鏡板付轡や複環式円板轡・円板轡と共に遊環の利用方法であり、円環轡が創出された際の初現的な連結方法である可能性が高い。この想定が正しければ当該連結方法の採用事例が少なく、おおむねMT85型式前後で採用されなくなることは、円環轡としては効果的な連結方式ではなかったと想定できる。また、衡介在型連結も、板状鏡板付轡の装着方法である。

一方、遊環に鏡板・衡・引手を装着する「遊環介在型」、鏡板に引手を直接接続する（引手は通常衡先環か遊環に

- 装着される)「鏡板介在型」は板状鏡板付轡などにはない技法であることから、この2者は鑑轡など板状鏡板付轡以外の連結方法から創出されたと考えたい。したがって、兵庫鎖立聞素環円環轡の成立期に存在する鏡板介在型と遊環介在特殊型・銜介在型は、成立経緯が異なる可能性がある。この多様な連結方法の成立経緯の解明は今後の課題である。
- 8 単連の兵家11号墳はTK10型式に位置づけられるがTK209型式以降の単連の兵庫鎖立聞素環円環轡とは、引手壺の形状(L字形)、組合立聞の形状から別の種類としたほうが良いと考える。兵庫鎖立聞素環円環轡の1型式とする場合は、これ以外に同様のものが確認できないことから、I段階の特殊な事例、試行的な轡として位置づけるのが妥当と考える。
- 9 筆者が集成した無立聞素環円環轡約140例のうち、轡の連結方法が判明する約95例で、遊環介在型が用いられたものは4例に過ぎず、素環あるいは組合立聞円環轡での採用は限られている。一方、鏡板介在型約40例、銜介在型約50例であり、この2者が主に用いられたといえる。
- 10 韓半島で金銅装轡なので、兵庫鎖を組合立聞あるいは立聞に取り付けるものが現状で確認されていないため、兵庫鎖が採用された経緯については憶測の域を出ないが、f字形鏡板付轡の別造り瓢形引手壺を取り付けるために利用された兵庫鎖が発想転換で立聞に採用されたと想定する。ただし、今後の検証が必要であることは言を俟たない。
- 11 MT15～TK10型式期には、棒状の吊金具を装着するものの、群馬県少林山台12号墳のような大型の兵庫鎖(U字形金具)を装着するもの、吊金具を直接素環に繋ぐものなどが確認できるが、どれも数例の出土にとどまり、兵庫鎖を取り付けるものほど一般化していない。したがって、主体的に生産されていない特殊な事例も生産されているが王權主導とはいえない。
- また、6世紀前半には図9に挙げた無吊金具素環円環轡等が存在するが、兵庫鎖を取り付ける日本列島系の轡とは異なり、韓半島系の轡として韓半島との交流によりもたらされた(田中2015)可能性を考慮しておきたい。

引用・参考文献

【論文】

- 諫早直人 2012 「洛東江下流域における馬具の地域性とその背景」『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣
- 大野義人 2008 「環状鏡板付轡についての基礎的研究」『地域・文化の考古学』 下條信行先生退任記念事業会
- 大谷宏治 2006 「馬具の分布からみた東海古墳時代社会」『東海の馬具と飾大刀』 東海古墳文化研究会
- 大谷宏治 2008 「瓢形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』40号 静岡県考古学会
- 大谷宏治 2010 「鉢留立聞環状鏡板付轡の意義」『研究紀要』16 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2016a 「小型矩形立聞環状鏡板付轡について」『関西大学文学部考古学研究室設立六拾周年記念考古学論集』(刊行予定)
- 大谷宏治 2016b 「中原4号墳出土刀剣類・馬具の特徴と被葬者の性格」『伝法 中原古墳群』 富士市教育委員会
- 岡安光彦 1984 「環状鏡板付轡について」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX
- 坂本美夫 1985 『馬具』(考古学ライブラリー34) ニューサイエンス社
- 沢村雄一郎 2005 「馬具 尾張地域」『愛知県史』資料編3 古墳 愛知県
- 鈴木一有 2002 「経ヶ峰1号墳の再検討」『三河考古』15 三河考古刊行会
- 鈴木一有 2016 「中原4号墳から出土した生産用具が提起する問題」『伝法 中原古墳群』 富士市教育委員会
- 関義則・宮代栄一 1987 「県内出土の古墳時代の馬具」『埼玉県立博物館紀要』14
- 滝沢 誠 1992 「複環式鏡板付轡の検討」『森將軍塚古墳』更埴市教育委員会
- 田中祐樹 2011 「造り付け立聞環状鏡板付轡の出現と展開」『歴史民俗研究』8 板橋区教育委員会
- 田中由理 2007 「日本・韓国出土轡の法量比較検討」『待兼山論叢』41 史学篇 大阪大学文学会
- 田中由理 2015 「5世紀後葉から6世紀前葉の日本列島の馬具生産とその背景」『古代武器研究』11 古代武器研究会
- 張允禎 2005 「韓国固城松鶴洞古墳出土馬具に対する検討」『朝鮮古代研究』6 朝鮮古代研究刊行会
- 長野県 1988 『長野県史』考古資料編 全1巻(四)
- 花谷 浩 1986 「素環鏡板付轡の編年とその性格」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』 山本清先生喜寿記念論集刊行会
- 福永伸哉 2005 「いわゆる継体期における威信財変化とその意義」『井ノ内稻荷塚古墳の研究』 大阪大学井ノ内稻荷塚古墳発掘調査団
- 松尾昌彦 1983 「下伊那地方における馬具の一様相」『長野県考古学会誌』45
- 松浦宇哲 2005 「三葉文楕円形杏葉の編年と分析」『井ノ内稻荷塚古墳の研究』 大阪大学稻荷塚古墳発掘調査団
- 宮代栄一 1995 「飯氏二塚古墳出土の馬具」『飯氏二塚古墳』福岡市教育委員会
- 宮代栄一 1995 「宮崎県出土馬具の研究」『九州考古学』70
- 宮代栄一 1996 「熊本県出土の馬具」『肥後考古』9
- 宮代栄一 1999 「熊本県才園古墳出土遺物の研究」『人類史研究』11
- 宮代栄一 2015 「長野県出土の馬具の研究」『信濃大室積石塚古墳群の研究IV』 明治大学考古学研究室
- 桃崎祐輔 2005 「稻堂8号墳出土馬具の検討」『稻堂古墳群』行橋市教育委員会
- 【報告書】(表1以外、日本語読み)
- 宇美町教育委員会 1980 『正籠古墳群』
- 愛媛県埋蔵文化財調査センター 1984 『四国縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』
- 大分県教育委員会 1992 『上ノ原横穴墓群I』

- 京都府埋蔵文化財調査センター 1995 『京都府遺跡調査概報』62
- 慶尚大学校博物館 1989 『晋州加佐洞古墳群』
- 百濟文化開発研究院・公州大学校博物館 1994 『論山茅村里百濟古墳群発掘調査報告書(II)』
- 熊本県教育委員会 1980 『清水古墳群 野寺遺跡 林源衛門墓』
- 近藤義郎編 1952 『佐良山古墳群の研究』
- 御所市教育委員会 2005 『巨勢山古墳群V』
- 昌原大学校博物館 1992 『咸安阿羅伽耶の古墳群(I)』
- 昌原文化財研究所 2005 『固城内山里古墳群II』
- 新吉富村教育委員会 1990 『宇野台古墳』
- 朝鮮総督府編 1927 『梁山夫婦塚と其遺物』
- 大刀洗町教育委員会 1994 『本郷鶯塚1号墳』
- 富岡市教育委員会 2000 『高瀬24号古墳』
- 豊橋市教育委員会 2000 『三ツ山古墳調査概報告(III)』
- 長野県 1982 『長野県史』考古資料編全1巻(2)
- 沼津市教育委員会 2015 『松長古墳群』
- 日田市教育委員会 1959 『法恩寺古墳』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『漆谷遺跡』
- 福泉博物館 2015 『加耶地域の馬具』
- 木浦大学校博物館 2000 『Report on the Excavation of Hakchung-ri Site, Youngkwng & Yungsan-ri Site, Hampyong』(ハングル)
- 行橋市教育委員会 2005 『稻童古墳群』
- 八女古窯跡群調査団 1971 『菅ノ谷窯跡群』
- 14 長野県 1982 『長野県史』考古資料編全1巻(2)
- 15 松尾昌彦 1983 「下伊那地方における馬具の一様相」『長野県考古学会誌』45
- 16 東海古墳文化研究会 2006 『東海の馬具と飾大刀』
- 17 富士市教育委員会 2016 『伝法 中原古墳群』
- 18 浜北市 2004 『浜北市史』資料編 考古
- 19 豊橋市教育委員会 1993 『上寒之谷1号墳』
- 20 豊橋市教育委員会・国際文化財編 2008 『稻荷山古墳群(II)』
- 21 沢村雄一郎 1996 『愛知県・岐阜県内古墳出土馬具の研究』南山大学大学院考古学研究室
- 22 船来山古墳群発掘調査団 1999 『船来山古墳群』糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会
- 23 各務原市教育委員会 1991 『西洞山古墳群発掘調査報告書』
- 24 名張市遺跡調査会 1999 『横山古墳群』
- 25 福井県教育委員会 1978 『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』13
- 26 滋賀県教育委員会 1992 『平成2年度滋賀県埋蔵文化財調査年報』
- 27 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2005 『出土文化財資料化収納業務報告書II-1』
- 28 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988 『京都府遺跡調査概報』第29冊
- 29 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2011 『京都府遺跡調査報告集』第146集
- 30 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992 『京都府遺跡調査概報』第51冊
- 31 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992 『京都府遺跡調査概報』第50冊
- 32 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987 『京都府遺跡調査概報』第24冊
- 33 綾部市教育委員会 1987 『京都府綾部市文化財調査報告』14
- 34 奈良教育大学文化財コース 2006 『吉備塚古墳の調査』奈良教育大学
- 35 檜原考古学研究所 1978 『兵家古墳群』奈良県教育委員会
- 36 檜原考古学研究所 1981 『新沢千塚古墳群』奈良県教育委員会
- 37 檜原考古学研究所 1988 『寺口忍海古墳群』新庄町教育委員会
- 38 檜原考古学研究所附属博物館 2003 『古墳時代の馬との出会い』
- 39 東大阪市教育委員会 1973 『山畠古墳群』岡安光彦 1984 「環状鏡板付轡について」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX
- 40 羽曳野市教育委員会 1985 『古市遺跡群VI』
- 41 兵庫県教育委員会 1993 『箱塚古墳群』近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(XXII)
- 42 矢野健一 1999 「兵庫県加西市剣坂古墳調査報告」『辰馬考古資料館考古学研究紀要』3 財團法人辰馬考古資料館

【表1 文献】

- 1 栃木県教育委員会 1986 『星の宮神社古墳・米山古墳』
- 2 岩舟町教育委員会 1988 『小野巣根古墳群4号墳』
- 3 南河内町 1992 『南河内町史』史料編1 考古
- 4 東京国立博物館 1980 『東京国立博物館図版目録』古墳遺物編(関東I)
- 群馬県古墳時代研究会 1996 『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』
花谷 浩 1986 「素環環状鏡板付轡の編年とその性格」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
- 群馬県古墳時代研究会 1996 『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』
- 黒田古墳群発掘調査会 1985 『黒田古墳群』
- 朝霞市教育委員会 2011 『一夜塚古墳出土遺物調査報告書』
- 木更津市教育委員会 2002 『請西遺跡群発掘調査報告書VIII』
- 寺村光晴・西川修一他 1998 「伊勢原市北高森古墳群と出土遺物」『かながわ考古学財団調査報告』33 付編別冊
- 東京国立博物館 1986 『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇(関東III)
- 山梨県 1999 『山梨県史』資料編2
- 佐久市教育委員会 2000 『蛇塚遺跡・蛇塚古墳』
- 土屋長久 1975 『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』

- 43 加東郡教育委員会 1984 『名草3号墳・4号墳』
- 44 大手前大学史学研究所オープンリサーチセンター 2009
『南所3号墳』
- 45 鳥取市教育福祉振興会 1995 『六部山古墳群II』
- 46 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財センター
2009 『めんぐろ古墳の研究』
- 47 岡山県教育委員会 1975 『中国縦貫自動車道建設に
伴う発掘調査』4
- 48 岡山県教育委員会 1973 『中国縦貫自動車道建設に
伴う発掘調査』2
- 49 近藤義郎 1952 「中宮第1号墳発掘調査報告」『佐良
山古墳群の研究』第1冊
- 50 岡山県教育委員会 1995 『松尾古墳群・斎富古墳群・
馬屋遺跡ほか』
- 51 勝央町教育委員会 2010 『小池谷遺跡・小池谷古墳
群』
- 52 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 2000 『常森古
墳群』
- 53 山口県教育委員会 1984 『王喜寺山古墳』
- 54 栗林誠治氏の御教授による。
栗林誠治 2016 「鳴門市ぬか塚古墳出土馬具の研究」
『青藍』11 考古フォーラム蔵本
- 55 高松市教育委員会 2008 『横岡山古墳 城所山古墳
群』
- 56 松山市埋蔵文化財センター 2004 『東山古墳群II』
- 57 松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1998
『瀬戸風峠遺跡』
- 58 松岡文一 1998 「長谷奥古墳発掘調査概報」『遺跡』
36 遺跡発行会
- 59 大野義人 2008 「環状鏡板付轡についての基礎的研究」『地域・文化の考古学』 下條信行先生退任記念事業
会
- 60 愛媛県教育委員会 1982 『北条市上難波南古墳群調
査報告書』
- 61 今治市教育委員会 2010 『高地栗谷1号墳』
- 62 愛媛県教育委員会 1984 『愛媛県埋蔵文化財調査報
告書』15
- 63 今治市教育委員会 1974 『唐子台遺跡群』
- 64 愛媛県埋蔵文化財調査センター 1998 『四国縦貫自
動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』X II
- 65 高知県文化財団 1991 『大谷古墳』
- 66 福岡県教育委員会 1984 『福岡県文化財調査報告書』
68
- 九州前方後円墳研究会 1999 『九州における横穴式
石室の導入と展開』
- 67 行橋市教育委員会 1982 『隼人塚古墳』
- 68 福岡市教育委員会 1988 『羽根戸遺跡』
- 69 福岡市教育委員会 1985 『席田遺跡群（V）丸尾古
墳』
- 70 大任町教育委員会 1998 『稻荷山横穴墓群』
- 71 宮代栄一・白木原宣 1994 「佐賀県出土の馬具の研
究」『九州考古学』69号
- 72 大分県教育委員会 1973 『飛山』
- 73 村上恭通氏の御教授による。
- 74 熊本県教育委員会 2007 『城ヶ辻古墳群』
- 75 宮代栄一 1996 「熊本県出土の馬具」『肥後考古』9
- 76 宮代栄一 1999 「熊本県才園古墳出土遺物の研究」
『人類史研究』11
- 77 熊本県教育委員会 1980 『熊本県文化財調査報告』
第46集
- 78 宮崎県教育委員会 1972 『九州縦貫自動車道埋蔵文
化財調査報告（1）』
宮崎県総合博物館 1982 『宮崎県総合博物館収蔵資
料目録』
宮代栄一 1995 「宮崎県出土馬具の研究」『九州考古
学』70
宮代栄一氏の御教授による。
- 79 えびの市教育委員会 2009 『島内地下式横穴墓群 岡
元遺跡』
- 80 宮崎県立西都原考古博物館ホームページ（所蔵品検索）
で確認。
- 81 新富町教育委員会 2004 『祇園原遺跡・春日遺跡』
- 82 宮崎県埋蔵文化財センター 2003 『山崎上ノ原第2遺
跡 山崎下ノ原第1遺跡』
- 83 慶北大学校博物館 1993 『陝川玉田古墳群IV』

図の出典

- 図1 1 (宮代1996) 2 (表1文献) 3 (東海古墳文化研
2006) 4 (日田市1959) 5 (富岡市2000) 6・7 (京都
府埋文センター1995) 8 (表1文献1と同じ)
- 図2・5 表1文献より
- 図3・4・6～8・11 筆者作成
- 図9 1・6 (百済文化開発研他1994) 2 (朝鮮総督府編
1927) 3 (慶尚大博物館1989) 4～8 (福泉博2015) 9・
11・12・13・15・17・19 (表1文献より) 10 (宮代1996)
14 (行橋市2005) 16 (八女古窯跡群調査団1971) 18
(宇美町1980)
- 図10 1 (東海古墳文化研2006) 2 (日田市1959) 3 (御
所市2005) 4・5 (表1文献より)